

## (7) 昆虫類

昆虫類 001	トンボ目 ヤンマ科	岡崎市 絶滅
<b>アオヤンマ <i>Aeschnophlebia longistigma</i> Selys</b>		

### 【選定理由】

東海地方のうち静岡県、岐阜県、愛知県では絶滅危惧Ⅱ類とされている。愛知県内での確実な生息地は三河地方では、蒲郡市（2011年）での記録がある。岡崎市では、生息地での環境悪化が顕著であり、1980年の記録が最後となっている。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	準絶滅危惧

### 【形態】

体長70mm内外で、生きていた時の体色は若草色から黄緑色でたいへん美しい。乾燥させた標本では、退色してしまう。腹部はくびれがなく、ずんぐりした感じがする。翅胸前面と腹部の背側に黒条がある。



### 【分布の概要】

国内では、北海道の一部と本州、四国九州に分布する。

愛知県では豊橋市、田原市、蒲郡市、刈谷市、名古屋市、稲沢市など三河地方、尾張地方ともに少ないながらも1980年代までは、確認・記録されている。

市内では、矢作川右岸の平地にある森越町の神社の池に生息していた。1980年の調査で生息を確認したものの、それ以後は、継続的な観察をしているものの全く姿が見られない。

### 【生息地の環境／生態的特性】

主に平地や丘陵地のヨシ、コガマ、マコモなどの抽水植物が繁茂し、泥深い池沼やヨシなどの育った湿原や挺水植物の茂る流れの穏やかな環境にも生息するといわれている。本種は、ヨシなどの繁茂した環境を好むようで、水底にも腐葉土が堆積していることが生息の目安と考えられる。成熟した♂は♀を求めて、ヨシ原の中を飛翔する。♀と出会うとすぐに交尾をし、付近の植物に静止する。交尾を終えた♀は、池や沼に生えるヨシなどの生きた植物の中に単独で産卵する。体色がヨシによく似ており、たいへん見つけにくい。

### 【過去の生息状況／絶滅の要因】

岡崎市では、文献などによりその生息を遡っても、この森越町の記録が唯一である。発生地は、矢作川に近い神社の池であったが、池自体の改修工事や神社の周りの環境の変化によって、その姿を見ることができなくなった。

### 【保全上の留意点】

日本の各地で本種が絶滅、もしくは激減している理由としては、生息するヨシ原を有する湿地や沼の減少がある。岡崎市における森越町以外での生息の可能性が高い場所は、宅地開発に伴う埋め立てや水源の枯渇による池や沼の消滅により今後の生息は期待できない。

### 【特記事項】

2011年、蒲郡市において、ヨシに囲まれて、雨水を湛えた環境から少ないながらも、生息が確認された。また、三河地方における貴重なトンボも同地域に見られた。このような平地における豊かな自然の残る場所が保全されることを願いたい。

### 【関連文献】

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
岐阜県健康福祉環境部自然環境森林課(編), 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物-岐阜県レッドデータブック-, 350pp. 岐阜県, 岐阜市.  
静岡県自然環境調査委員会(編), 2004. まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック-(動物編), 351pp. 羽衣出版, 静岡市.  
山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

フタスジサナエ *Trigomphus interruptus* (Selys)

## 【選定理由】

東海地方では、静岡県と愛知県では絶滅危惧Ⅱ類とされている。岡崎市では、1972年の柱町での記録が最後となり、その後は、姿を見ることができない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	準絶滅危惧

## 【形態】

体長 45mm ほどで体色は黄色と黒の色彩である。翅胸には 2 本の黒い条があり、「フタスジ」の名にもなっている。前の黒条が♀は途中で途切れることがある。複眼は未成熟のうちは、黄色味が強く、時間が経ち、成熟すると深い緑色となる。



豊田市太平町 ♂, 2007 年 5 月 4 日, 鈴木栄二 採集

## 【分布の概要】

日本固有種で、静岡県、岐阜県以西の西日本に生息し、四国や九州にかけて分布する。

愛知県では、三河地方では、新城市、豊田市、刈谷市で確認されており、尾張地方では、瀬戸市、日進市、美浜町に分布している。

市内では、藤川町、柱町からの記録がある。いずれの産地でも 4 月下旬から 5 月中旬にかけて成虫が観察されている。

## 【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地にかけての挺水植物の豊かな池沼に見られる。近縁のサナエトンボより大きな池を好む。1 世代に 2 年かかり、幼虫は池沼の底に潜っているという。羽化は他のサナエトンボ同様、水際へ上がって行われ、せっかく伸びた翅が風の影響で波に浸かることも報告されている。未熟のうちは発生地の周辺で過ごし、成熟すると♂は生息する池の周りの植物の葉上に静止し、縄張りをもつようになる。縄張りの中に入った♀はすぐに交尾する。産卵はホバリングをしながら草むらの上や草の間で卵塊をつくり、体を軽く振って行われることが多いという。

## 【過去の生息状況／絶滅の要因】

岡崎市では、1971 年に藤川町で採集されている。その後、1972 年の柱町にある庄司田湿原での記録以後には見られない。柱町の発生地は、平地に広がる湧水のある池で、その周りには豊かな植生が広がっていた。しかし、付近に多くの宅地が開発されるとともに、道路のアスファルト舗装や水生植物の除去などで、生息地周辺の環境が急変した。

## 【保全上の留意点】

日本の各地で本種が絶滅、もしくは激減している理由としては、家庭排水の流入による水質の悪化、宅地開発に起因するヘドロの蓄積、植生の単一化など、様々な要素が関係していると思われる。特に、水質の変化が本種に与える影響は大きいと報告されている。汚水の流入を抑えるとともに、周りの自然度を保全していかなければならない。

## 【特記事項】

岡崎市に隣接している豊田市では、まだ、本種を確認することができる。この産地でも周りの開発が迫っており、その保全が期待される。

## 【関連文献】

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫 (上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
愛知県環境調査センター (編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, 651pp.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
静岡県自然環境調査委員会 (編), 2004. まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック-(動物編), 351pp. 羽衣出版, 静岡市.  
山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 003	トンボ目 サナエトンボ科	岡崎市 絶滅
<b>オグマサナエ <i>Trigomphus ogumai</i> Asahina</b>		

### 【選定理由】

愛知県では絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。岡崎市では、1980年代初めには、数か所から記録があるものの、現在では、発生していた池沼がなくなり、全く姿を見ることができない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	準絶滅危惧

### 【形態】

体長 45mm ほどの小さなサナエトンボで、翅胸の前面に大きな黄色い L 字の斑紋がある。タバサナエと混生したが、翅胸の黒条の中に狭い黄色の部分が見られること、♂の副性器が円弧を描くが、タバサナエの方がより大きいことで区別される。



岡崎市岡町 ♂, 1982年4月17日, 鈴木栄二 採集

### 【分布の概要】

西日本に生息し、静岡、岐阜、長野、福井以西の本州、四国、九州などにみられる。四国、中国地方では分布が限られるという。

愛知県では、豊橋市、新城市を中心にした東三河の平野部や西三河では岡崎市、豊田市、刈谷市などの平野部、尾張地区では、名古屋市守山区、瀬戸市、犬山市、長久手町など平地から丘陵地にかけての産地が報告されている。

市内では、岡町、岩津町の農業用のため池を中心に生息していた。1980年代の初め以降、発生する池や沼の消滅が進んでおり、現在では確認することができない。

### 【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地から平地にかけての抽水植物の繁茂する古くからある池に見られる。4月中旬から羽化が始まり、5月中下旬まで見られる早春のトンボである。羽化直後の未熟なうちは、発生する池や沼から離れた林や草むらに生活する。成熟した♂は発生地に戻り、周辺に生える植物の葉の上に静止し、縄張りをもつ。♀が縄張りに侵入するとすぐに連結、交尾に入る。生息地では、タバサナエとともに見られることが多い。

### 【過去の生息状況／絶滅の要因】

岡崎市では、1982年の岡町の記録が最後である。発生地は、農業用の遊水池になっており、人の手がかわり、古くから管理されていた。しかし、1980年代になって、水田の減少や開発に伴う埋め立てで、発生する池そのものが消滅してしまった。飛翔力の弱い本種にとって、1つの生息地の消滅は、その地域での種の絶滅に結びつく可能性が大きい。

### 【保全上の留意点】

日本の各地で本種が絶滅、もしくは激減している理由としては、生息する池や沼そのものの消滅である。発生する池や沼の水質の変化や発生地周辺の環境の変化も生物にとって生息数を減少する要因ではあるが、人の生活圏に近い環境で生き延びてきた本種は、生息する池や沼の消滅以上に絶滅に迫りやる要因はない。

### 【特記事項】

近縁のタバサナエは 2012 年現在、岡崎市にわずかではあるが生息している。

### 【関連文献】

- 穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫 (上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
 愛知県環境調査センター (編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 静岡県自然環境調査委員会 (編), 2004. まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック-(動物編), 351pp. 羽衣出版, 静岡市.  
 鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 004	トンボ目 エゾトンボ科	岡崎市 絶滅
<b>トラフトンボ <i>Epitheca marginata</i> (Selys)</b>		

**【選定理由】**

東海地方では、愛知県と静岡県でそれぞれ、準絶滅危惧種、絶滅危惧Ⅱ類とされている。岡崎市では、1963年の記録が一番古く、確実な標本として残っているのは1977年のものが最後である。それ以降は、確認されていない。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

**【形態】**

体長は55mm内外。体色は黒字に黄色の虎斑模様であり、名前の由来ともなっている。♂と♀では体色に違いはないが、♂の副性器が目立ち、♀は腹部がややずんぐりしている。また、♀の翅には前縁に沿って、黒い条がある。この黒条は個体によって差異が見られ、消失する個体もあるといわれている。



岡崎市岡町 ♂, 1977年5月15日, 鈴木栄二 採集

**【分布の概要】**

国内では本州、四国、九州に分布する。近畿各県にも広く分布するが、いずれの県も産地が減少している。

愛知県では、豊橋市、岡崎市、豊田市、名古屋市、瀬戸市、旧祖父江町、旧弥富町など平地から丘陵地にかけて広範囲に記録がある。

市内では、旧六ツ美村での1963年の記録が最も古い。その産地が消滅したのち、岡町にある農業用のため池が唯一のものとなった。

**【生息地の環境／生態的特性】**

平地から丘陵地にあるジュンサイやヒルムシロなどの浮葉植物が豊富な比較的大きな池沼に生息する。成虫は5月に多く、成熟した♂は水面の上をホバリングをまじえて、縄張り飛行する。産卵は卵が紐のように長い状態で周りの植物に絡むようになされる。

**【過去の生息状況／絶滅の要因】**

岡崎市では、1977年の岡町の記録が最後である。発生地は、水質もよく、古くからの灌漑用のため池でジュンサイ、ヒルムシロなどの浮葉植物が豊富であり、多くの平地性のトンボの絶好の観察地であった。しかし、1980年代初めの開発に伴い、発生地が埋め立てられ、姿を見ることができなくなった。

**【保全上の留意点】**

日本の各地で本種が絶滅、もしくは激減している要因としては、開発による埋め立て、池沼の水質の悪化や外来魚の食害などが考えられる。人と生活する空間が重複するトンボ類にとって、人の活動による影響がどうしても大きい。平地にある池沼の宅地開発や工場用地への転換は、小さな命を絶滅に追いやることになる。絶滅を避けるためには、同程度の環境を持つ池沼への移植が有効ではないか。

**【関連文献】**

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 静岡県自然環境調査委員会(編), 2004. まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック-(動物編), 351pp. 羽衣出版, 静岡市.  
 鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 005	トンボ目 トンボ科	岡崎市 絶滅
<b>ベッコウトンボ <i>Libellula angelina</i> Selys</b>		

**【選定理由】**

東海地方では、岐阜県では絶滅危惧 I 類、愛知県、静岡県と三重県では絶滅危惧 I A 類とされている。いずれの既知産地でも数を減らしている。岡崎市では、1980 年の採集記録が最後となり、その後は姿を見ることができなくなった。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I A 類
環境省	絶滅危惧 I A 類

**【形態】**

体長 45mm 内外で、翅の基部と結節、縁紋付近に顕著な黒褐色の斑紋がある。体色は未熟のうちは飴色で、その名前の由来にもなっている。成熟すると♂は黒くなる。



岡崎市竜泉寺町 ♂, 1980 年 4 月 29 日, 鈴木栄二 採集

**【分布の概要】**

国内では、宮城県、新潟県以西の本州と四国、九州に生息している。現在では、各地で産地が失われ、確実な生息地は、三重県、静岡県、兵庫県、山口県、九州の一部に限られている。三重県の北勢地域では、1960 年代に絶滅したという。愛知県では豊橋市、刈谷市、名古屋市、豊明市、美浜町などの平地や丘陵地で生息が確認されている。岡崎市では旧六ツ美村で 1961 年に、竜泉寺町で 1980 年に採集・記録されている。

**【生息地の環境／生態的特性】**

平地の周囲に草原があり、古くからの比較的浅い池沼で、抽水植物がまばらに生え、腐植質が厚く堆積した環境を好む。成虫は 4 月中旬から羽化し、5 月上旬に多くみられる。羽化直後の未熟な個体は、池の周囲の草原にいて、枯れ草に静止していることが多い。未熟なうちは、体色が茶色系で保護色となっている。成熟した♂は、発生地の水辺に縄張りを持ち、抽水植物の葉先に静止し、時々、パトロール飛行を行う。

**【過去の生息状況／絶滅の要因】**

平地に点在する水生植物の多い自然の豊かな池沼は、人の生活と隣接しており、その影響を受けやすい。そのため、宅地や工場用地造成のため、埋め立ての危機にあったり、生活排水の流入で水質が大きく変化したりといった脅威にさらされることが多い。岡崎市の産地では、発生地が環境が大きく変化したり、外来魚の移入も認められたりしており、1980 年以降、生息は確認されていない。

**【保全上の留意点】**

愛知県の残された生息地では、抽水植物や周辺の植物の保全を推進したり、外来魚の駆除を行ったりしている。産地の孤立化が進んでいるようで、複数の生息地を確保することが、長く保護する上では、必要ではないか。

**【特記事項】**

国内希少野生動植物種に 1994 年に指定された。これにより、採集や標本の譲渡が制限されるようになった。

**【関連文献】**

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫 (上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009・動物編, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 静岡県自然環境調査委員会(編), 2004. まもりたい静岡県の野生生物・県版レッドデータブック(動物編), 351pp. 羽衣出版, 静岡市.  
 鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 三重県環境森林部自然環境室, 2006. 三重県レッドデータブック 2005 動物, 498pp. 財団法人三重県環境保全事業団, 津市.  
 山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 006	チョウ目 シジミチョウ科	岡崎市 絶滅
<b>シルビアシジミ <i>Zizina emelina</i> (de l'Orza)</b>		

**【選定理由】**

東海地方では、愛知県と岐阜県では絶滅、静岡県と三重県では絶滅危惧Ⅰ類とされている。岡崎市では、1957年の記録が一番古く、1964年の記録が最後となり、絶滅した。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅
環境省	絶滅危惧ⅠB類

**【形態】**

春型の雄の翅表は、外縁部は細い黒色帯で、それ以外は青紫色となる。雌では、外縁部の黒色帯が発達し、基部付近のみが青紫色となる。夏型では、雄は外縁部の黒色帯が発達し、基部付近のみが青紫色となり、雌では全体がほぼ黒色になる。裏面は白色～灰褐色で小さな黒い斑紋がある。秋型は、春型に近い斑紋となる。

本種は、市内の各所で発生しているヤマトシジミによく似ているが、後翅裏面の一番内側にある黒い斑紋の並び方が、ヤマトシジミのように半円状にならないことで区別できる。



♂ (裏面)  
岡崎市下佐々木町, 1964年5月10日, 太田達之 採集

**【分布の概要】**

主に西日本に生息し、関東平野と紀伊半島、滋賀県、中国地方、四国の瀬戸内海側、九州北部、鹿児島県周辺などに生息し、種子島が南限となる。

愛知県では、木曾川、庄内川、矢作川の堤防が主な産地であった。

市内では、下佐々木町の矢作川堤防にのみ生息していた。1959年の伊勢湾台風の際、矢作川堤防は、決壊寸前の状態になり、一時、生息地は水没した。しかし、翌年には発生し、1964年までは、発生を繰り返した。

**【生息地の環境／生態的特性】**

河川の堤防や荒地など、背丈の低い草地に生息する。幼虫の食草は、マメ科のミヤコグサで、関西地方の一部の発生地では、シロツメクサに食草を転化させた個体群もある。幼虫で越冬し、成虫は5～11月に出現し、地上低く飛んでミヤコグサなどの花で吸蜜する。本種の生息環境となる二次草地は、ススキなどの背丈の高い植物が繁茂したりすると、食草のミヤコグサが生育できなくなり、結果として本種もいなくなる。発生地の環境をそのまま保全するよりも、人による草刈り作業など積極的な環境管理が必要である。

**【過去の生息状況／絶滅の要因】**

岡崎市では、1964年の下佐々木町の記録が最後となった。発生地は、矢作川にかかる美矢井橋の西側の堤防法面に広がるミヤコグサの群落であったが、堤防の改修工事によって、法面がコンクリートで覆われたためミヤコグサがなくなり、絶滅した。

**【保全上の留意点】**

日本の各地で本種が絶滅、もしくは激減している理由としては、食草のミヤコグサが激減していることに起因していることは確かであるが、様々な要素が関係しており、その発生地に応じた保全が必要になる。人手を加えて、背丈の低い草地環境を保全することが基本である。

**【特記事項】**

2003年、大阪の伊丹空港では、近隣の発生地から飛来した個体が、滑走路周辺に繁茂するシロツメクサに食草転換をし、大発生していることが確認された。

最近の研究によって、南西諸島に分布しているものは別種となり、ヒメシルビアシジミ *Zizina otis* (Fabricius) となった。

**【関連文献】**

猪又敏男・植村好延・矢後勝也・神保宇嗣・上田恭一郎, 2010-2013. 日本産蝶類和名学名便覧. <http://binran.lepimages.jp/>  
 野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所, 2007. 日本のレッドデータ検索システム. <http://www.jpnrdb.com/>  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(執筆者 杉坂美典)

昆虫類 007	チョウ目 タテハチョウ科	岡崎市 絶滅
<b>ヒメヒカゲ <i>Coenonympha oedippus</i> (Fabricius)</b>		

【選定理由】

愛知県では、新城市のみに生息し、他の産地は全て絶滅した。岡崎市では、大幡町と池金町の2か所で発生していたが、大幡町では1969年、池金町では1970年前後に絶滅した。愛知県は、条令で本種を指定希少野生動植物種として指定し、捕まえたり採ったり、殺したり傷つけたりすることを禁じている。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I A 類
環境省	絶滅危惧 I A 類

【形態】

ジャノメチョウ類の中では、最も小型で、雄は雌よりも少し小さくなる傾向がある。翅表は無紋で、雄は黒褐色、雌は雄よりもやや明るい暗褐色である。裏面は、雄雌とも同じ橙褐色である。裏面には眼状紋が外縁に並び、雄の前翅裏面には眼状紋はないか、あっても1~2個で小さく、外縁近くの銀色条がない。雌では眼状紋の数が多くて大きくなり、外縁近くの銀色条は発達する。本種に似た種はいない。



♀  
岡崎市大幡町，1968年6月15日，杉坂美典 撮影

【分布の概要】

本州の特産種で、群馬県から中部地方を経て中国地方に局地的に分布したが、群馬県、和歌山県、石川県では絶滅した。愛知県では、名古屋市およびその周辺、豊田市、岡崎市、新城市、豊橋市に局所的に分布していたが、新城市以外の産地では絶滅した。岡崎市では、大幡町と池金町に生息していた。

【生息地の環境／生態的特性】

中部地方の山地帯に分布するものは、乾燥した草原に生息する。東海地方、近畿地方、中国地方に分布するものは、モウセンゴケの生えるような明るく開けた湿地、およびその周辺に生息する。幼虫の食草は、カヤツリグサ科の植物で、ヒカゲスゲ、ヒメカンスゲ、アオスゲ、ショウジョウスゲ、ススキ科のススキなどが記録されている。成虫は、年1回の発生で、6月から8月まで見られる。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

東海地方や中国地方に生息するものは、湿地との関係が深く、湿地が人による環境破壊を受けることによって激減し、本種も姿を消すようになった。現在、本種が生息している全ての県は、絶滅危惧種として指定している。愛知県では、新城市作手（旧作手村）に生息し、保護している。岡崎市では、大幡町と池金町の2ヶ所の発生地があった。大幡町では、村落の端にある雑木林に面した小さな湿地に生息していた。1968年には数十頭が発生したが、翌年、湿地が全て埋め立てられ、絶滅した。池金町では、少ないながらも北山湿地の各所で見られたが、1980年前後、湿地が乾燥し草原化した時に姿を消した。

【保全上の留意点】

本種が、日本の各地で絶滅、もしくは激減している理由は、湿地が激減しているためであり、湿地およびその周辺の環境を保全することが重要である。

【特記事項】

最近の研究によって、3つのグループに分けられた。  
 ・ヒメヒカゲ 長野県・群馬県亜種 *Coenonympha oedippus annulifer* Butler  
 ・ヒメヒカゲ 本州中部地方個体群 *Coenonympha oedippus* ssp.  
 ・ヒメヒカゲ 近畿地方・中国地方亜種 *Coenonympha oedippus arothius* Okada et Torii  
 愛知県産は、本州中部地方個体群に属し、亜種名については専門家が研究中である。

【関連文献】

猪又敏男・植村好延・矢後勝也・神保宇嗣・上田恭一郎，2010-2013. 日本産蝶類和名学名便覧. <http://binran.lepimages.jp/>  
 野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所，2007. 日本のレッドデータ検索システム. <http://www.jpnrdb.com/>  
 愛知県環境調査センター(編)，2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課，名古屋.

(執筆者 杉坂美典)

## ホソクロマメゲンゴロウ *Platambus optatus* (Sharp)

### 【選定理由】

本種は本州、四国、九州の各地から分布が知られているが、どこでも個体数が少なく、最近では生息地の自然環境の悪化で、従来の生息地では絶滅したり、絶滅寸前のところが多い。また、愛知県では個体数がきわめて少なく、県内での分布状態もまだよく判明していない。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

### 【形態】

体長は 7~8mm 内外で黒色、光沢を有し、背面は緩く膨隆し、外形は逆卵形状を呈している。頭部や前胸背板などは上翅も含めて黒色、頭部の頭頂部に 1 対の暗赤色紋を有し、前胸背板の前縁と後縁に沿って点刻列を生じ、上翅の中央部にもそれぞれ 3 列の点刻列が見られる。



(体長 7mm)

岡崎市小呂町小呂湿地,  
1999年6月13日, 大平仁夫 採集

### 【分布の概要】

本種の分布は本州、四国、九州に及んでいるが、一般に里山周辺の湧き水のでる水草が繁茂した水溜りやため池に分布している。

岡崎市では小呂町の小呂湿地で 1999 年 6 月 13 日に 2 個体が見出された以外に、今日まで市内からの追加記録はない。

### 【生息地の環境／生態的特性】

森・北山 (2002) によれば、本種は石や落葉の下などに生息しているとしているが、岡崎市で見出された場所は、里山の谷間にある湿地で、周辺には水草が繁茂、常に谷水が滲み出ている浅い水溜まりである。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

岡崎市では小呂町の小呂湿地で 1999 年 6 月 13 日に 2 個体が見出された以外に、今日まで市内からの追加記録はない。

### 【保全上の留意点】

本種が見出された小呂湿地は、岡崎市による湿地再生と保全作業が続けられていて、湿地の環境は人為的にも維持されている場所である。類似した湧き水のでる湿地がこの周辺にはまだあるので、そこにも生息している可能性があると思われる。また、この地域からは貴重種のおオヒメゲンゴロウ *Rhantus erraticus* Sharp, 1884 の分布記録もあるので、この地域の環境保全にはこれからも周辺地域も含めて、注意して行きたいと考えている。

### 【引用文献】

森 正人・北山 昭, 2002. 図説・日本のゲンゴロウ 改訂版, 231pp. 文一総合出版, 東京.

### 【関連文献】

大平仁夫, 2001. 岡崎市に分布する 2 種のゲンゴロウ. 三河の昆虫, (48): 515.

(執筆者 大平仁夫)



ツヤヒラタコメツキ *Aganohypoganus mirabilis* (Miwa)

## 【選定理由】

愛知県内では、岡崎市、豊明市、瀬戸市、豊田市などから分布記録があるだけで、岡崎市では毎年発生が見られた明大寺町竜美丘の丘陵地が開発されて住宅地になってからは、東部地域の里山周辺で僅かに分布記録を残すのみとなっている。成虫の詳しい生態や幼虫の生息場所はまだ判明していない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

## 【形態】

体長は雄では11~13mm、雌では14~15mm、体は黒色（まれに濃チョコレート色）で光沢を有し、無毛状であるが、小盾板には灰色毛を密生している。前胸背板の側縁は縁取られ、翅の条線は深く印する。触角と肢は黄褐色である。



♂（体長12mm）

岡崎市明大寺町，1954年3月30日，大平仁夫 採集

## 【分布の概要】

本種の原因は岐阜市の金華山麓で、1928（昭和3年）年8月に採集された1雄個体である。その後愛知県、三重県、和歌山県、香川県などからわずかな記録があるのみである。

## 【生息地の環境／生態的特性】

成虫は3月下旬から5月上旬に発生するが、個体数はきわめて少なく、発生地は主として市街地やその周辺に残されている雑木林とその周辺である。成虫が花や灯火に飛来した例はないが、コナラやクヌギやサクラなどの里山の雑木林に生息しているようである。集団では生息していない。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

個体数が少なく、主として市街地周辺地域で発生しているため、土地整備などによる人為作用で、そこが住宅地や工場団地などに転用されて、生息地が失われる例が多いためと思われる。

## 【保全上の留意点】

本種は日本固有で1属1種からなる学術的にもきわめて重要な種である。今後は幼虫の生息場所や生態などをより明らかにして、生息地の環境の保全に役立てていきたいと考えている。

## 【関連文献】

大平仁夫，1995．三河地方から採集されるコメツキムシ(13)．佳香蝶，47(184): 57-59.

大平仁夫，2001．ツヤヒラタコメツキのなぞ．KINOKUNI，(60): 11-12.

愛知県環境調査センター(編)，2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-，651pp.

愛知県環境部自然環境課，名古屋．

(執筆者 大平仁夫)

昆虫類 010	チョウ目 シロチョウ科	岡崎市 絶滅危惧 I A類
<b>ツマグロキチョウ <i>Eurema laeta</i> (Boisduval)</b>		

**【 選定理由 】**

愛知県では、近年、激減しており、最近の記録では、2012年5月に掛斐川堤防で記録されているが、非常に少なくなっている。岡崎市では、1980年代には、本宮山の西麓の男川堤防に少なくなかったが、2000年代になってからは、記録が出ていない。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	絶滅危惧 I B類

**【 形態 】**

開長 18~22mm。地色は黄色、翅表の外縁は黒色である。夏型と秋型があり、夏型は秋型に比べると翅形に丸みを帯びる。秋型は、前翅の先端が角張り、後翅の裏面には、褐色の筋が現れる。

近似種のキタキチョウ（旧キチョウ）は、本種よりもやや大型で、前翅の外縁の黒帯が先端から下端までつながっているが、本種では、下端の部分には達しないことで区別することができる。しかし、本種の夏型は、翅形や斑紋がキタキチョウと似ており、同定には注意が必要である。本種の方が翅形はやや丸味を帯びることや前翅外縁の黒帯の凹凸の形状を確認する必要がある。



岡崎市奥山田町，1982年9月15日，杉坂美典 撮影

**【 分布の概要 】**

日本では宮城県以南に分布し、南限は屋久島である。

愛知県では、河川の堤防や荒地に局所的ではあるが広く分布していた。

市内では、矢作川や男川・乙川などの堤防、村積山や桑谷山、本宮山などの林道沿い、その周辺の荒地に広く分布していた。夏型の記録は少ないが、秋型は各所で見られた。しかし、この30年間は記録がない。

**【 生息地の環境／生態的特性 】**

食草はマメ科植物のカワラケツメイで、春から秋まで年に5回ほど発生を繰り返し、秋に発生した個体は成虫越冬をする。飛び方は比較的緩やかで、ヒメジョオンやセイタカアワダチソウなどの花で吸蜜したり、岩場から水が染み出る場所に集まって吸水したりすることもある。

近似種のキタキチョウは、多くのマメ科の植物を食草としているが、本種は、在来植物の中ではカワラケツメイのみを食草としている。

河川の堤防では、発生地としての記録がなかった場所でも、突然、かなりの数の個体数を確認できることがある。これは、カワラケツメイが生えている場所に偶然に飛来した個体の子孫が増えたためである。しかし、このような場所では、数年で姿を消すことが多い。

**【 現在の生息状況／減少の要因 】**

食草のカワラケツメイは、日当たりの良い荒地や堤防、各種の植物が密生した草地の主に南側の縁の部分などに生える植物で、荒地の減少や河川の改修工事によって食草が激減し、本種も非常に少なくなっている。

**【 保全上の留意点 】**

2003年ごろから、名古屋市守山区では宅地の造成工事に伴い、帰化植物のアレチケツメイが増え、これに食草転換したツマグロキチョウが大発生していた。しかし、宅地化が進むに連れて発生地が減少し、2012年10月の調査では、守山区上志段味の造成地では多産していたが、それ以外ではほとんど見るができなかった。今後、帰化植物のアレチケツメイがどのような分布をしていくかが、本種の分布に大きく影響を与えると思われる。

**【 関連文献 】**

猪又敏男・植村好延・矢後勝也・神保守嗣・上田恭一郎, 2010-2013. 日本産蝶類和名学名便覧. <http://binran.lepimages.jp/>  
 野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所, 2007. 日本のレッドデータ検索システム. <http://www.jpnrdb.com/>  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(執筆者 杉坂美典)

ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata* Butler

## 【選定理由】

神奈川県以西の本州、四国、九州に分布するが、絶滅した県もある。愛知県でも激減しており、岡崎市では、未公開の1ヶ所のみで発生しているが、個体数が少ないため、このままだと絶滅する可能性は大きい。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

## 【形態】

開長は、春型の雄で37~40mm程度、雌は少し大きくなる。夏型の雄ではさらに小形となる。翅表は茶褐色、前翅と後翅にそれぞれ1個の眼状紋がある。裏面には細かい波状模様があり、後翅裏面の眼状紋は通常は3個である。雌は、翅表の色彩が雄よりも淡く、翅表の眼状紋の周囲の黄色の輪が広く明瞭になる。

近似種のヒメウラナミジャノメは、本種よりも少し小さく、翅表は茶褐色、前翅に1個、後翅に2個の眼状紋がある。後翅裏面の眼状紋は、通常は、ほぼ同じ大きさの5個である。

近似種との区別は、通常は、後翅裏面の眼状紋の数を比較するのが容易である。しかし、まれではあるが、本種でも大きな眼状紋に連続して小さな眼状紋が現れる個体があり、合わせて5個になる個体もあるので、注意が必要である。この場合、本種は、一番上の眼状紋が最大になることや5個の斑紋の大きさが違っていることで、区別することができる。



♂  
岡崎市, 2010年9月12日, 杉坂美典 撮影

## 【分布の概要】

愛知県では、名古屋市、犬山市、春日井市、瀬戸市、日進市、愛知郡長久手町、知多郡武豊町、豊田市、岡崎市、新城市、豊橋市に記録がある。しかし、現在では、名古屋市周辺では絶滅し、尾張地方の一部、豊田市、岡崎市、新城市にわずかな発生地があるだけであるが、どこも発生数は多くない。岡崎市では、以前は大幡町と池金町に生息していたが、どちらも絶滅した。現在は未公開の1ヶ所のみで発生している。

## 【生息地の環境／生態的特性】

静岡県の西部では、河川の堤防で発生しているが、愛知県内では、明るい湿地およびその周辺の草地に生息している。6月中旬~7月中旬と8月下旬~9月中旬の2回発生する。幼虫の食草はカヤツリグサ科やイネ科の植物である。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

岡崎市大幡町で発生していたものは、1969年に湿地が埋め立てられたことによって絶滅した。池金町のもは、湿地が乾燥化した際に姿を消した。

岡崎市の未公開の発生地は、以前はかなり大きな湿地であったが埋め立てられ、その一部が50㎡程度の小さな湿地として残っているものである。しかし、湿地の環境はあまり良い状態でなく、周辺の田畑の農薬の散布等の影響を受け、いつ絶滅してもおかしくない状況である。2011年9月4日に1頭を確認できたが、2012年6月中旬から7月中旬にかけて、5週連続で調査し、8月下旬から9月上旬にかけても調査したが、全く見つからなかった。

## 【保全上の留意点】

本種がこの狭い湿地に生息していることは、湿地の地主に知らせてあり、環境保全に配慮していただけている。しかし、発生数が少ないため、遺伝的な面でも存続が心配である。

## 【特記事項】

日本本土に分布するものは、日本本土亜種 *Ypthima multistriata nipponica* Murayama とされ、対馬に分布するものは、対馬・大陸亜種 *Ypthima multistriata ganus* Fruhstorfer とされた。

## 【関連文献】

猪又敏男・植村好延・矢後勝也・神保宇嗣・上田恭一郎, 2010-2013. 日本産蝶類和名学名便覧. <http://binran.lepimages.jp/>  
 野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所, 2007. 日本のレッドデータ検索システム. <http://www.jpnrdb.com/>  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(執筆者 杉坂美典)

## ゲンバイトンボ *Platycnemis foliacea sasakii* Asahina

### 【選定理由】

全国的にほとんどの産地で個体数や生息域の減少が顕著で評価区分は環境省準絶滅危惧 (NT)、愛知県絶滅危惧 IB 類 (EN) となっている。岡崎市においても数箇所のみで局所的に生息、近年のゲリラ的な集中豪雨で土砂が流され水質が悪化、また水害対策等による河川改修により精細な生息環境がなくなり、著しく減少傾向にある。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B 類
環境省	準絶滅危惧

### 【形態】

成虫、♂全長 37~41mm、腹長 30~33mm、後翅長 19~21mm。♀全長 37~41mm、腹長 31~33mm、後翅長 20~23mm。

日本産モノサシトンボ科中最小種。♀の方が♂よりわずかに大きい♂の中・後肢の脛節は顕著に偏平化した白い軍配状を呈するのが特徴。

モノサシトンボに似ているが、モノサシトンボとは後頭後縁に後頭条がある以外頭部に斑紋がないこと、翅胸側面の第二側縫線に細かい黒色条があり、腹部側縁の淡色部が広く、特に♂ではこの部分が楔形をしていることで識別できる。

幼虫、体長 11~14mm、尾鰓は長大で幅広く不鮮明な斑紋がある。モノサシトンボ属とは腹部第 7 節にも側棘があることで識別できる。



岡崎市須淵町 ♂, 2005 年 6 月 12 日, 鈴木栄二 撮影

### 【分布の概要】

国内の分布、本州東北部から九州中部にかけて記録されている。愛知県内では尾張~西三河の丘陵地から低山地にかけて 8 市町村 (旧市町村単位) で記録されている。

新城市作手の記録があるが絶滅。岡崎市では 1953 年に藤川町で記録があるが絶滅。現在は須淵町、檜山町、池金町で局所的に生息。

### 【生息地の環境/生態的特性】

主に丘陵地や低山地のわき水のある挺水植物や沈水植物などが繁茂する、植生豊かでゆるやかな水質良好な清流に生息する。成虫♂は他の雄や雌に出会った時に白い軍配状の肢を広げて自分をアピールする行動をとる。産卵は挺水植物内の生きた組織内に産卵する。幼虫はゆるやかな、むしろよどみに近い流れの沈水植物の茂みや挺水植物の水中に没した茎や根ぎわなどにつかまったり、泥に潜ったりして生活している。河川内の水溜りワンドに生息する場合でも、そこに周辺からきれいな水が供給されることが必要である。

幼虫期間 1 年程度 (1 年 1 世代) 成虫出現は 5 月下旬より 8 月下旬、最盛期は 6 月下旬頃。

### 【現在の生息状況/減少の要因】

岡崎市では、1979 年に須淵町、岩戸町、鍛冶屋。1982 年岩戸町、淡淵町、鍛冶屋、檜山町。1995 年須淵町。2000 年桜形町、檜山町。2003 年池金町。2005 年桜形町。2009 年檜山町の記録があるが絶滅した生息地も多い。現在、須淵町、檜山町、池金町で生息確認しているが河川の改修工事により絶滅寸前状況の地域もある。

### 【保全上の留意点】

各地で本種が絶滅、もしくは激減している理由として本種幼虫は水質悪化にかなり弱く、また産卵場所であり、幼虫の生息場所となる岸辺の植生が護岸工事等により失われると、即絶滅してしまう脆さを有している。河川改修をする場合は、規模、方法等細心の注意が必要である。

本種は保守的な性質で新天地を求めて分散することはほとんどなく、発生地へ固執することが多いので一旦産地が失われた場合、再び環境が元に戻っても、本種が戻ってくる可能性は極めて低い。

### 【特記事項】

池金町のゲンバイトンボは、2006 年より継続調査をしてきたが 2011 年の河川改修により生息数が激減した。

### 【関連文献】

- 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- 鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.
- 杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司, 1999. 原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑, 956pp. 北海道大学出版会, 札幌.
- 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ, 532pp. 文一総合出版, 東京.
- 安藤 尚, 2006. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(6). 佳香蝶, 58 (226): 25-30.
- 鈴木栄二, 1997. トンボのすむ街, 79pp. 第一プリント社, 岡崎.
- 豊田市自然環境基礎調査会, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書, 453pp. 豊田市.
- 穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫 (上), 506pp. 愛知県農林務部自然保護課, 名古屋.

(執筆 柵木宗孝)

昆虫類 013	トンボ目 トンボ科	岡崎市 絶滅危惧 I B 類
<b>キトンボ <i>Sympetrum croceolum</i> (Selys)</b>		

**【選定理由】**

東海地方では、静岡県で絶滅危惧 I A 類、三重県で準絶滅危惧に指定されている。静岡県では、1970 年以降、わずかな市町村で記録があるにすぎないという。三重県内の生息地は丘陵地に点在し、いずれの産地でも数は少ないという。愛知県では、絶滅危惧 I B 類に指定されている。岡崎市では、1960 年代に小美町や藤川町に記録がある。標本としては、岡町（1976）のものが一番古いですが、この産地は埋め立てにより、すでに絶滅している。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B 類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長 40mm 内外で、全身が橙黄色で目立った斑紋はなく、翅の基部のほぼ半分と前縁は翅端まで、鮮やかな黄褐色で名前の由来となっている。アカトンボの仲間としては、ややずんぐりした感じがする。



岡崎市岡町 雄, 1976 年 10 月 17 日, 鈴木栄二 採集

**【分布の概要】**

国内では、北海道から九州まで広く分布するが、生息地はかなり局地的であるという。愛知県では、岡崎市、豊田市、天白区、名東区、豊明市、尾張旭市、瀬戸市、長久手町などの丘陵地で生息が確認されている。岡崎市では、文献によると、桑谷町（1966）でも記録され、岡町（1976）、高隆寺町（1980）、竜泉寺町（1980）で採集・記録されている。

**【生息地の環境／生態的特性】**

平地から低山地の開放的で、水位が安定している水質の良い池が生息環境である。川の水をせき止めた人工的な池にも生息する。幼虫は、抽水植物の根元や沈んだ落ち葉の陰に潜んでいる。岡崎市では、成虫は 10 月を中心に 11 月頃まで観察される。成熟した♂は、池の一面をホバリング飛行したり、岸辺の植物に静止したりして、縄張りをつくる。産卵は、♂と♀が連結して行われることが多い。生息する池は少なくなったが、まだ市内ではその姿を見ることができる。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

岡崎市では、1980 年頃までは丘陵地にある農業用のため池や水害に備えた治水ダムに生息していた。これらの水域は、周辺の環境の変化の影響を受けやすく、水源が枯渇することも生息を危うくしている。また、生息する池が埋め立てられることも減少の一因である。さらに、放棄される水田の増加により水域の水位が低下したり、周辺の植物の種類が変化したりすることも、本種の生息に大きく影響している。

**【保全上の留意点】**

現在、生息している産地付近の環境の保全が第一と考えられる。本種にとっての生息に必要な環境は、水質を含めた水位の保持であったり、池周辺の植生の変化であったりする。また、外来魚の移入にも注意を払う必要がある。これらの貴重な自然を総合的に保全することが必要である。

**【特記事項】**

移動性があまりなく、生息地からの分散が見られないことが、減少の一因となっているという。

**【関連文献】**

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫 (上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 静岡県自然環境調査委員会(編), 2004. まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック-(動物編), 351pp. 羽衣出版, 静岡市.  
 鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 三重県環境森林部自然環境室, 2006. 三重県レッドデータブック 2005 動物, 498pp. 財団法人三重県環境保全事業団, 津市.  
 山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 014	カメムシ目 コオイムシ科	岡崎市 絶滅危惧ⅠB類
<b>タガメ <i>Lethocerus deyrollei</i> (Vuillefroy)</b>		

**【選定理由】**

本種は水田のため池には普通に見られた身近な種であったが、水田が土地整備で乾田化して、ため池の多くが消滅、本種の主要な捕食小動物のカエルや淡水魚などがいなくなり、本種も絶滅危惧種に追いやられている。しかし、山地のため池にはまだ希に生存しているし、きれいな河川のワンド状になった水溜まりにも、生息情報があるので、生息環境の保全が急務になっている。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧ⅠB類
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

**【形態】**

体長は 50~60mm 内外、扁平状で暗褐色、前肢は大きなカマ状をしていて、これでカエルや子魚などを捕食している。中肢と後肢は水かき作用をして水中を移動している。

また、後翅がよく発達しているので、飛翔することもできるし、かつては灯火にもよく飛来していた種である。

**【分布の概要】**

分布は広く、本州から琉球列島、朝鮮半島や中国や台湾や東南アジア地域の水田稲作地帯に広く分布しており、東南アジア地域の一部では食用とされている。

**【生息地の環境／生態的特性】**

本種は水田とそこに水を供給するため池と密接に関係してきた種で、カマ状をした前肢でカエルや池の魚などを捕食、鋭い口吻でその捕獲物の体液や筋肉などを溶かして吸収する。産卵は水中の水草や枯枝などに生まれ、雄親は卵が孵化するまで見守って保護することが知られている。卵から孵った幼虫は水中で生活、他の小昆虫や子魚などを捕食し、5回脱皮して成虫になる。冬は枯れ草の下や池底に静止して過ごす。



(体長 60mm)

岡崎市池金町, 1995年7月10日, 大平仁夫 採集

**【現在の生息状況／減少の要因】**

かつては岡崎市の水田地帯のため池や水路などには普通に見られた種であるが、現在では一部の地域で僅かに残存しているだけになっている。ため池の減少と水質の汚濁、タガメの餌となるカエル類や在来の子魚類がいなくなったことなども原因の一つと思われる。

**【保全上の留意点】**

現在残っている古くからのため池や周辺の水路を保全、水質をよくして、池にタガメ類の餌となる在来の子魚やカエル類を増やすことが大切である。しかし、養魚池では養魚を捕食するので、注意が必要である。

**【関連文献】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編, 651pp.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
宮武頼夫監修・橋爪秀博, 1994. タガメのすべて, 32pp. トンボ出版, 大阪.

(執筆者 大平仁夫)

ゲンゴロウ *Cybister japonicus* Sharp

## 【選定理由】

かつては農耕地のため池やその周辺の水路に普通に見られた種で、そこに生息する小魚やカエル類などを捕食していたが、戦後の農薬の使用、水田の整備やため池の水質の汚濁などによって、急速に個体数が減少し、現在では生息する池や水路などはごくまれになっており、絶滅に近い状態にある。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧ⅠB類
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

## 【形態】

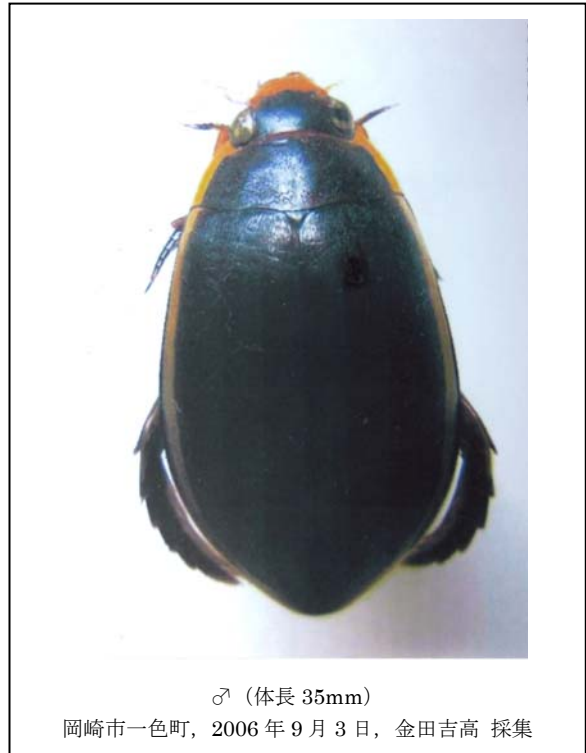
体長は35～40mm内外でやや扁平状、卵形状で黒色、光沢を有し、体背面はやや緑色の光彩を有する。体腹面は扁平状で黒褐色、後肢は大きく、これで水中をかいで移動している。後翅は発達していて、飛翔して移動も可能である。

## 【分布の概要】

北海道から九州にかけて広く分布していたが、愛知県ではごくまれな種になっている。岡崎市では額田地域のごく一部で分布が確認されているだけで、絶滅に近い状態になっている。

## 【生息地の環境／生態的特性】

本種はもともとため池に分布していて、そこに生息しているカエルや小魚などを捕食していたが、水田の乾田化やため池の水質の汚濁、外来種の繁殖などが加わり、生息環境の悪化が減少の主な原因となっている。成虫は腹端をとときき水面上に出して、空気をとり入れているが、そこからはみだした気泡内に水中の溶存酸素をとり入れて呼吸もしている。幼虫も水生で捕食性である。



♂ (体長 35mm)

岡崎市一色町, 2006年9月3日, 金田吉高 採集

## 【現在の生息状況／減少の要因】

前述のように、本種は主に水田のため池やその周辺の水路にも分布していて、そこに生息しているカエルや小魚などを捕食していたが、現在では水田の乾田化とため池の水質の汚濁も加わり、生息環境の悪化が減少の主な原因となっている。

## 【保全上の留意点】

本種は幼虫も捕食性のため、人為的に個体数を増やすことは簡単ではないが、古くから残っているため池の水質の良い池に、在来のフナや小魚や水生植物などを増やして、在来の水田地帯の生態系を再現していくことが必要と思われる。

## 【関連文献】

森 正人・北山 昭, 2002. 図説 日本のゲンゴロウ 改訂版, 231pp. 文一総合出版, 東京.  
愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(執筆者 大平仁夫)

ミヤマチャバナセセリ *Pelopidas jansonis* (Butler)

## 【選定理由】

愛知県では、近年、激減しており、最近の記録では、2012年5月に揖斐川堤防で記録されているが、非常に少なくなっている。岡崎市では、1980年代には、本宮山の西麓の男川堤防に少なくなかったが、2000年代になってからは、記録が出ていない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B 類
環境省	リスト外

## 【形態】

後翅裏面の中室内に大形の銀白斑があり、春型では夏型に比べると、この銀白斑がさらに大きくなる。亜外縁にある白斑列は、多少ジグザグになり、前翅よりの2つ目の斑紋は2つの斑紋が連続して大きくなる。

本種は、イチモンジセセリ、オオチャバナセセリに似ている。イチモンジセセリは、亜外縁にある白斑列は、一列に並ぶ。まれに中室内に銀白斑がある個体が現れることがあるが、その場合でも銀白斑は小さいので容易に区別できる。オオチャバナセセリは、中室内に銀白斑はなく、亜外縁にある白斑列は、W字型に並ぶ。



♂ (裏面)

岡崎市山綱町，1979年9月5日，杉坂美典 採集

## 【分布の概要】

愛知県では、丘陵地から山地にかけて広く分布していたが、その産地は局所的であった。

市内では、1979年5月に戸崎町にある溜め池の堤防で確認されたのが最初の記録となった。

その後、数回、溜め池周辺を調べたが、再発見ができなかった。同年8月下旬には、桑谷山へ続く林道沿いの草地にいるのではないかと数回調査したところ、9月になり2頭目の記録が出た。しかし、その後は見つからず、戸崎町でも確認はできなかった。旧岡崎市では、これ以降の記録は出ていない。しかし、1980年代では、本宮山の西麓にある石原（現、石原町）では、男川の堤防付近にある雑木林の周辺の草地には少なくなく、1ヶ所で数頭が飛びまわっている光景も時々見られた。しかし、本宮山の西麓でも、この十数年間は記録が出ていない。

## 【生息地の環境／生態的特性】

成虫は、河川や湖沼の堤防などの木々に囲まれた比較的狭い草原に見られることが多く、雑木林や草原が混在するような場所を好む。飛び方は素早いですが、イチモンジセセリよりは遅く、飛んでもすぐに葉上に止まる習性がある。年2回の発生で、第1化の春型は4～6月、第2化の夏型は7～8月に出現し、春型の方が少し小型になる。

幼虫の食草はイネ科のススキ、オオアブラススキ、チガヤなどである。イチモンジセセリなどの近似種は、幼虫で越冬するが、本種は、蛹で越冬する。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

岡崎市石原町で記録のあった場所は、環境が大きく変化した様子はないが、草原の周辺の樹木が大きくなり、若干、草原の日当たりが悪くなった場所もある。しかし、本種が姿を消した原因は不明である。本種が茶色の小型の種で、目立たない蝶であることや飛んでいる時は、近似種と似ているため、止まらないと確認ができないことが、記録が出て来ない要因にもなっている。

## 【保全上の留意点】

かつて本種が発生していた場所の環境は、河川や湖沼があり、様々な植物が生育できる豊かな自然に囲まれた場所である。長い年月の間、人手が加わって保全されてきた草原などが、人手不足のために放置され、雑木林化していくことも要因であろう。適度に人手を加えて、環境を保全することが大切である。

## 【関連文献】

猪又敏男・植村好延・矢後勝也・神保宇嗣・上田恭一郎，2010-2013. 日本産蝶類和名学名便覧. <http://binran.lepimages.jp/>  
 野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所，2007. 日本のレッドデータ検索システム. <http://www.jpnrdb.com/>  
 愛知県環境調査センター(編)，2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-，651pp.  
 愛知県環境部自然環境課，名古屋.

(執筆者 杉坂美典)



昆虫類 017	トンボ目 イトトンボ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>オオイトトンボ <i>Paracercion sieboldii</i> (Selys)</b>		

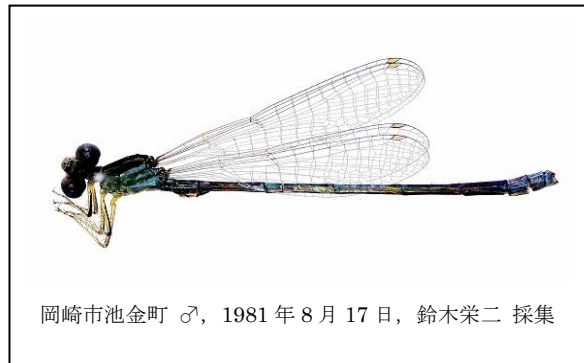
**【選定理由】**

東海地方では、静岡県で絶滅危惧ⅠA類に指定されている。静岡県内の生息地は数か所で、いずれの既知産地でも数を減らしているという。愛知県では、絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。岡崎市では、稲熊町や池金町で1980年前後に生息が確認されたが、その後は数を減らしている。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

**【形態】**

体長35mm内外で、頭部眼後紋はコンマ状で大きい。♂は薄青色が鮮やかで、尾部下付属器は上付属器より長い。♀は黄緑色と青色の二つの型がある。夏に羽化するものは、春に見られる個体に比べて小型になる。



岡崎市池金町 ♂, 1981年8月17日, 鈴木栄二 採集

**【分布の概要】**

国内では、北海道、本州、四国、九州に広く分布している。しかし、いずれも生息地は限定される傾向がある。

愛知県では、豊橋市、豊田市、刈谷市、天白区、大府市、尾張旭市、瀬戸市、長久手町などの平地から丘陵地で生息が確認されている。

岡崎市では、稲熊町(1976)、池金町(1981)で採集・記録されている。しかし、現在では、確実な生息地はなくなってしまった。

**【生息地の環境／生態的特性】**

平地から丘陵地の水生植物が豊富な池沼や湿地、休耕田などに生息する。1年に2世代が現れる。未熟な個体や♀は水域周辺の草むらに生活している。成熟した♂は水域に戻り、水面付近の草に静止し、縄張りをもつ。交尾は周辺の草の上で静止して行われ、そのまま連結して、産卵に移る。時に、潜水して産卵することも報告されている。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

岡崎市では、1976年に稲熊町、1981年に池金町で採集・確認された。その直後、稲熊町の生息地は、コガマやモウセンゴケの繁茂する植生が豊かな湿地であったが、埋め立てられてしまい、多くの種類のトンボが消滅した。池金町の発生地は、湧水を伴う休耕田であったが、水深がなく、周りの環境の変化でたやすく消滅することが考えられる。移動性の乏しい種にとっては、生育環境の急変は影響が大きい。

**【保全上の留意点】**

既知生息地の護岸工事や水生植物の除去、水位の変動を伴う改修などは、本種の生息に影響を与えることと考える。人と生活圏が重なることが多いトンボ類にとって最も避けたいことは、生息する池沼の埋め立てである。幼虫(ヤゴ)時代に水中生活をするトンボにとって、確実に姿を消すことになる。

**【関連文献】**

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 静岡県自然環境調査委員会(編), 2004. まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック-(動物編), 351pp. 羽衣出版, 静岡市.  
 鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

ムスジイトトンボ *Paracercion melanotum* (Selys)

## 【選定理由】

東海地方では、岐阜県で絶滅危惧ⅠB類に指定されている。岐阜県内の生息地は、いずれも生息条件が明らかに悪化しており、数を減らしているという。愛知県では、評価区分は指定されていない。岡崎市では、羽根町で1979年と1996年に採集されたが、その後は姿を見ることが難しくなった。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【形態】

体長35mm内外で、頭部眼後紋は細くつぶれた形で小さい。♂は鮮やかな水色の斑紋があり、美しい。♀は前胸の後縁が富士山型にえぐられ、体色は黄緑色で目立ちにくい。



岡崎市羽根町 ♂, 1979年8月31日, 鈴木栄二 採集

## 【分布の概要】

国内では、宮城県以南の本州、四国、九州、沖縄に分布している。

愛知県では、豊橋市、田原市、刈谷市、千種区、中区、中川区、東海市、長久手町などの平地から丘陵地を中心に生息が確認されている。

岡崎市では、羽根町で採集・記録されているが他の池沼では記録がない。

## 【生息地の環境／生態的特性】

生息環境としてヨシやガマなどの抽水植物が繁茂した水域が適しているが、人工的な都市公園の池など抽水植物の貧弱な水域にも生息するという。夏の終盤から秋にかけて個体数を増す。未熟な個体や♀は水域周辺の草や木の葉上に見られる。成熟した♂は水面近くの植物の上に静止し、縄張りをもつ。交尾は池付近の草の葉上で静止して行われる。産卵は♂と♀が連結して水面近くの植物に産み付ける。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

岡崎市では、1979年に羽根町のため池から、採集された。その後も付近の庄司田から見出されている。しかし、個体数は少なく、見られない年もある。これらの生息地では、周辺に住宅が造成され、それに伴い水質の悪化や池沼そのものの埋め立てが懸念される。さらに、外来魚の放流や水生植物の減少も本種の生息にはいい条件ではない。

## 【保全上の留意点】

生息する池沼の水質の保全や周辺付近のヨシ原や植生の保存が必要である。また、外来魚の放流による生態系の乱れにも配慮したい。都市化された人工の水域にもみられることから、池沼の埋め立てをできるだけ避け、池沼を確保することが大切である。

## 【関連文献】

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.

愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

岐阜県健康福祉環境部自然環境森林課(編), 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物-岐阜県レッドデータブック-, 350pp. 岐阜県, 岐阜市.

鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.

鈴木栄二, 1997. トンボのすむ街, 79pp. 第一プリント社, 岡崎.

山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

昆虫類 019	トンボ目 ムカシトンボ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>ムカシトンボ <i>Epiophlebia superstes</i> (Selys)</b>		

**【選定理由】**

環境省、愛知県共に絶滅危惧種には該当しないが、幼虫、成虫の生息地が河川の最源流域で水質が良く水温が低い環境であることから清流の環境指標生物とされている。

幼虫期間が5~8年と非常に長いため環境変化を受けやすく水質維持が大切である。

岡崎市の生息地も額田地域の乙川、男川水系の最源流域で、わずかに生息。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

**【形態】**

成虫、♂全長48~56mm、腹長37~44mm、後翅長27~32mm。♀全長45~53mm、腹長35~42mm、後翅長26~32mm。

均翅亜目と不均翅亜目の中間的特長をもつ中型のトンボ。体形はサナエトンボ科に似るが、翅形は均翅亜目に近いアオイトトンボ科に似る特異な体形から、即座に識別することができる。

体色は黒地に黄色の毛深いトンボで複眼は成熟しても灰色のままである。

幼虫、体長18~23mm、体は扁平で硬く濃い赤褐色か黒褐色、腹部の第3~6節側面には、やすり状の発音器がある。腹部の背棘はない、第7~9節に側棘がある。



岡崎市石原町 ♂, 2009年5月10日, 柵木宗孝 採集

**【分布の概要】**

日本特産種で北海道・本州・四国・九州に分布。しかし宮城県と千葉県では未記録。

愛知県では稲武町、新城市作手、豊田市で古くは1963年勘八町の記録がある。

岡崎市では2006年1月1日に額田郡額田町との合併により、生息環境である河川の源流域が多くなり、合併前は生息記録が無かったが、合併後、額田地域河川調査等により、生息地が点々と存在することが明らかになった。

**【生息地の環境／生態的特性】**

山間の河川源流域で森林にかこまれた水温の低い急流に生息する。未熟個体は谷間の明るい空間で摂食する。産卵は単独静止型。通常、流れの縁に生育している植物の柔らかい生体組織内（フキ、ワサビ、イタドリ）等に行われるが、最近、コケ類の生態組織内へも産卵することがわかった。幼虫は水深の浅い瀬石の隙間などで石にへばりついて生活している。うまく石面をはって歩く。羽化直前の約1ヶ月間離水して陸上で過ごす。幼虫期間は5~8年と非常に長い。成虫出現期は4月中旬より6月上旬、最盛期は5月。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

岡崎市では2005年石原町。2009年千万町町、石原町。2010年千万町町、石原町。2011年毛呂町、木下町の乙川水系、男川水系の源流域に生息（幼虫を含む）。

**【保全上の留意点】**

生息地が河川源流域で幼虫期間が5~8年と非常に長いため、その期間内に周辺の環境変化（水質、水温）に影響を与えないよう森林保全、開発には注意が必要である。

**【特記事項】**

ムカシトンボ科には世界で1属2種しか現生種はいない。日本のムカシトンボとヒマラヤに生息するヒマラヤムカシトンボ *Epiophlebia sinensis* の2種のみ。原始的な形態をしていて、生きた化石ともいわれる。

**【関連文献】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司, 1999. 原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑, 956pp. 北海道大学出版会, 札幌.  
 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ, 532pp. 文一総合出版, 東京.  
 安藤 尚, 2006. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(6). 佳香蝶, 58 (226): 25-30.  
 鈴木栄二, 1997. トンボのすむ街, 79pp. 第一プリント社, 岡崎.  
 豊田市自然環境基礎調査会, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書, 453pp. 豊田市.  
 穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.

(執筆者 柵木宗孝)

昆虫類 020	トンボ目 ヤンマ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>コシボソヤンマ <i>Boyeria maclachlani</i> (Selys)</b>		

**【選定理由】**

環境省、愛知県共に絶滅危惧種には該当しないが、岡崎市では幼虫は多く確認されるが、成虫の採集記録は非常に少なく数例のみである。河川の改修方法によっては激減する恐れがある。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

**【形態】**

成虫、♂全長 77～89mm、腹長 52～61mm、後翅長 49～55mm、♀全長 80～92mm、腹長 55～66mm、後翅長 50～60mm。

濃褐色の地に黄色い条斑がある複眼が著しく大きい大型ヤンマ。成熟♂の複眼の青みが強い。♀は地色が♂よりやや淡く、赤っぽい感じがする。独特の色斑と腹部第3節が著しくくびれることで、一見して識別できる。

幼虫、体長 39～45mm、背棘はなく、側棘は第4～9節にある。後頭の後側角に鋭く突出した角状突起がある、表皮はキチン化が進んで硬い。



岡崎市池金町 ♂, 2009年7月3日, 柵木宗孝 採集

**【分布の概要】**

日本特産種で北海道、本州、四国、九州と全国各地に分布するが、群馬、山梨からはまだ記録がない、地域によっては減少している。

**【生息地の環境／生態的特性】**

主に平野部、丘陵地、山地の木陰の多い流れに生息する。未熟個体は主に早朝と夕方に活動する、人の視界がきかなくなる頃まで川面周辺を敏速に飛翔して摂食する。日中はうす暗い林中で下枝などに静止していることが多い、成熟♂は3～4mの区間を水面低く往復飛翔して早を待ち構えたり、朽ち木周辺を丹念に見回しながら川沿いを探雌飛翔したりする。

産卵は単独静止型。挺水植物の茂みに潜り込むようにして根の湿った泥土や、やわらかい朽ち木倒木の組織内に静止産卵する。

幼虫は水中に露出した植物の根や挺水植物の根ぎわなどにつかまって生活している。採取すると肢を縮めて体を背面に強く反り返らせ、擬死行動をとる。

幼虫期間は1年半～2年程度(2～3年で1世代)。

成虫出現期は6月下旬～9月末頃までみられ7月下旬～8月上旬に最も多い。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

愛知県では、2010年瀬戸市海上町、新城市作手。岡崎市では、1977年須渚町、2006年池金町(落虫)、2009年(羽化殻)、2010年(成虫)の記録がある。

幼虫確認地域、池金町、樫山町、鳥川町、毛呂町、富尾町、大高味町。

**【保全上の留意点】**

幼虫の生息場所はヨシ等の根ぎわや落葉の下など。羽化は倒垂型で、挺水植物や岸辺の木などで垂直ないし、ややかぶさり気味の部位に定位して主に夜間に行く。

以上の事から河川内の挺水植物等の植生を確保する必要がある。

**【特記事項】**

幼虫は多くの地域で確認されるが、成虫を見る機会は少ない。

採集個体が少ないのは、薄明のわずかな時間だけ飛び回るといった特異な日周活動とも関係があるように思われる。

**【関連文献】**

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.

愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.

杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司, 1999. 原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑, 956pp. 北海道大学出版会, 札幌.

尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ, 532pp. 文一総合出版, 東京.

安藤 尚, 2006. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(6). 佳香蝶, 58 (226): 25-30.

鈴木栄二, 1997. トンボのすむ街, 79pp. 第一プリント社, 岡崎.

豊田市自然環境基礎調査会, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書, 453pp. 豊田市.

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.

(執筆者 柵木宗孝)

昆虫類 021	トンボ目 ヤンマ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>ルリボシヤンマ <i>Aeshna juncea</i> (Linnaeus)</b>		

**【選定理由】**

東海地方では、三重県で絶滅危惧ⅠB類に指定されている。三重県内の生息地は数か所で、いずれの既知産地でも数を減らしているという。愛知県では、評価区分は指定されていない。これは、本種の生息環境が山地を中心としていることに因っている。岡崎市では、池金町で1980年に採集されたが、その後は姿を見ることができなくなった。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

**【形態】**

体長 80mm 内外で、腹部は黒地に鮮やかな水色と黄緑色の斑紋があり、美しく、名前の由来になっている。オオルリボシヤンマに似るが、胸部の黄色の条の形で区別できる。



岡崎市池金町 ♂, 1980年9月2日, 鈴木栄二 採集

**【分布の概要】**

国内では、北海道、本州、四国に生息している。近畿地方では産地は高標高地に限られ、各府県で絶滅危惧種に選定されている。愛知県では設楽町、豊根村、長久手町などの山地や丘陵地で生息が確認されている。岡崎市では、池金町(1980)、鶴巣町(1980)で採集・記録されている。

**【生息地の環境／生態的特性】**

標高の高い地域に生息するものは、湿原の沼に依存している。丘陵地に見られるものは、山麓の湧水を伴う小規模な池沼に限られ、発生する。オオルリボシヤンマより小規模な水域を選び、種間で競合を避けているようである。成熟した♂は、水面近くをホバリングを交えながらパトロール飛行をし、縄張りをつくる。産卵は湿地のミズゴケや水際の枯れ木などにされる。岡崎市では、9月を中心に見られ、11月頃まで観察される。幼虫の時期が長く、1世代に2年かかるといわれている。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

岡崎市では、1980年に池金町の農業用のため池に続く谷間の小さな池から、採集された。同時期に市東部の鶴巣町の林道脇の湧水を伴う湿地からも発見された。これらの生息地では、水辺の規模が小さいことで、周辺の環境の変化の影響を受けやすく、水源が枯渇することも生息を危うくしている。また、生息する環境が湧水に起因する寒冷な水質を必要とすることから、そのような環境が次第に減少することが、本種の生息に大きく影響している。また、山麓の小さな湿地は道路の拡張など人工物の造成により、たやすく消滅することが考えられる。

**【保全上の留意点】**

産地付近での人為的な環境の負荷を極力、軽減する必要がある。本種にとっての生息に必要な環境は、水温を含めた水質であったり、産卵に必要なミズゴケや湿地植物であったりする。これらの貴重な自然を総合的に保全することが必要である。

**【関連文献】**

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 三重県環境森林部自然環境室, 2006. 三重県レッドデータブック 2005 動物, 498pp. 財団法人三重県環境保全事業団, 津市.  
 山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

ホンサナエ *Gomphus postocularis* Selys

## 【選定理由】

東海地方では、岐阜県は絶滅危惧Ⅰ類、静岡県は準絶滅危惧に指定している。いずれの既知産地でも数を減らしており、岐阜県では、個体数が危機的水準まで減少しているという。愛知県では、1950年前後の標本が存在するものの、既知産地としては、岡崎市、豊田市など矢作川流域や犬山市をはじめとする木曾川流域から記録はあるものの生息はかなり限定される。岡崎市では、1979年の採集記録が最初で、乙川流域や矢作川流域から少ないながら観察される。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【形態】

体長 50mm 内外で、ずんぐりとした独特の体型をしている。未熟なうちは、黄色味が強く、鮮やかであるが、次第に地味な色合いに変化する。



岡崎市暮戸町 ♀, 1979年5月17日, 鈴木栄二 採集

## 【分布の概要】

日本固有種で、北海道から九州まで分布するが、本州では、各既知産地で、激減し、場所によっては絶滅にひんしているという。

愛知県では、豊川、矢作川、木曾川などの大きな河川の中下流域から採集されたり、幼虫が確認されたりしている。

岡崎市では、暮戸町（1979）、天白町（1998）で採集・記録されている。

## 【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は大きな河川の中流域から下流域の川底が泥や砂の穏やかな流れに生息する。淵やよどみの水生植物の根元や泥に潜って生活し、羽化するまでに、2～3年かかるといわれている。成虫は4月中旬から羽化し、5月中下旬に多く見られる。羽化は一斉に、主に午前中に行われる。未熟な個体は、周囲の草原にいて、枯れ草に静止していることが多い。成熟したものは、水辺に戻り、水面に現れた石や植物にとまって縄張りをもつ。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

岡崎市では、新編市史資料編纂の調査時に矢作川右岸の暮戸町で♀の成虫が採集された。以後、この地域での生息は確認されていない。その後、1989年になって、天白町を流れる乙川から、多くのヤゴの羽化が観察された。その後は、付近でも、羽化殻が継続的に採集されており、少数ではあるが、生息している。

減少する要因としては、生活排水流入での水質の悪化、また、護岸工事に伴う水流の変化で、幼虫の生活環境が保たれなくなることが想定される。

## 【保全上の留意点】

岡崎市では、幼虫による生息の確認が進んでいる。それによると、市内では、矢作川や乙川を中心にして広く分布しているようである。保護する上では、水質の保全や護岸工事による水量の変化、生息地付近の植物の維持・管理も重要である。

## 【特記事項】

豊田市内を流れる矢作川では、1996年から1998年にかけて多くの記録が報告されている。

## 【関連文献】

- 穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 岐阜県健康福祉環境部自然環境森林課(編), 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物-岐阜県レッドデータブック-, 350pp. 岐阜県, 岐阜市.  
 静岡県自然環境調査委員会(編), 2004. まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック-(動物編), 351pp. 羽衣出版, 静岡市.  
 鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 豊田市自然環境基礎調査会, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書, 453pp. 豊田市.  
 三重県環境森林部自然環境室, 2006. 三重県レッドデータブック 2005 動物, 498pp. 財団法人三重県環境保全事業団, 津市.  
 山本哲央・新村捷介・西浦信明・宮崎俊行, 2009. 近畿のトンボ図鑑, 240pp. ミナミヤンマ・クラブ, 東京.

(執筆者 鈴木栄二)

## タバサナエ *Trigomphus citimus tabei* Asahina

### 【選定理由】

東海地方と近畿地方では、比較的普通に産するため愛知県では絶滅危惧種には該当しない。その他の地域では産地がかなり局地的でむしろ珍しい。

岡崎市においても、毎年多く発生する生息地は、ごく一部の溜池のみとなった。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	準絶滅危惧

### 【形態】

成虫、♂全長 43～47mm、腹長 31～33mm、後翅長 26～28mm。♀全長 43～47mm、腹長 30～32mm、後翅長 26～29mm。

翅胸部の前面に、太い L 字形の黄色斑がある小型のサナエトンボ。同属他種に酷似するが、翅胸部前面の前肩条が、上部の小黄色点だけしかないことで識別できる。♂の副性器は生殖片が円弧状で大きく目立つ。♀は近似種に比べ黄色味が強く、老熟してもよく残る。

幼虫、体長 23～26mm。褐色または濃褐色で腹部の各節背面に幅の広い褐色帯がある、平たい幅広短脚の中型ヤゴ。背棘は第 4～9 節、側棘は第 7～9 節にある。



岡崎市岡町 ♂, 1982 年 5 月 5 日, 鈴木栄二 採集

### 【分布の概要】

全国的には東海地方以西の本州、四国、九州に分布する。近畿地方各府県に分布するが局所的。

愛知県では犬山市、春日井市、小牧市、名古屋市、豊田市、新城市、豊川市、豊橋市。

岡崎市では池金町、岡町、上衣文町、桑谷町、明大寺町の記録があるが、10 年以上前の記録で現在では埋め立てられなくなった溜池も多い。

### 【生息地の環境／生態的特性】

止水域、流水域いずれにも適応している。丘陵地や低山地の樹林に囲まれた池沼や細流を含む湿地、流れが穏やかでヨシなどのある砂泥底の河川。

岡崎市では 4 月上旬に一番早く姿を現すトンボで、羽化は水面すれすれの位置で、落葉や小さな石などに定位し、腹部先端が少し水に浸かった状態で羽化することが多い。未熟個体は羽化場所近くの林縁で摂食する。

幼虫期間は 2 年（2 年 1 世代）成虫出現期は 4 月上旬～6 月下旬。最盛期は 5 月。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

岡崎市では池金町、小美町、鶴巣町で生息確認。池金町の溜池では毎年 4 月上旬に、たくさんの幼虫が一斉に羽化するが、このような溜池は市内では他に見当たらない。宅地開発、工業団地造成などにより、昔からの自然豊かな溜池が無くなりつつある。

### 【保全上の留意点】

放置された溜池も水生昆虫にとっては、絶好の生活場所である。自然保護の意味からも不要だからといって安易に開発造成等で埋め立ててはいけな。現在する溜池の場所、状態を調査把握し保護保全に努める。

特定外来生物のオオクチバスやブルーギル、アメリカザリガニ、コイ等には注意が必要。トンボの幼虫は、絶好の餌となって食べ尽くされる。

水生植物も大切で、イトトンボ類の産卵にも必要であるし、小幼虫類の隠れ場所や餌場にもなる。

### 【特記事項】

ユーラシア大陸には原名亜種（タイリクタバサナエ）が分布し、日本産は亜種 *tabei* (Asahina 1949) (タバサナエ) とされる。

### 【関連文献】

愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編, 651pp.

愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

鈴木栄二, 1985. 岡崎市のトンボ類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.811-837. 新編岡崎市史編さん委員会.

杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司, 1999. 原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑, 956pp. 北海道大学出版会, 札幌.

尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮, 2012. 日本のトンボ, 532pp. 文一総合出版, 東京.

安藤 尚, 2006. 愛知と岐阜のトンボ・分布資料(6). 佳香蝶, 58 (226): 25-30.

鈴木栄二, 1997. トンボのすむ街, 79pp. 第一プリント社, 岡崎.

豊田市自然環境基礎調査会, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書, 453pp. 豊田市.

穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.

(執筆者 柵木宗孝)

チッチゼミ *Kosemia radiator* (Uhler)

## 【選定理由】

東海地方では、三重県において準絶滅危惧（NT）とされている。生息環境であるマツ林やスギ・ヒノキ林の荒廃が主な原因で、数を減らしているという。岡崎市では、1981年に確実な採集記録がある。この記録以降は数を減らしている。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【形態】

日本本土（沖縄を除く）では最小のセミで、体長 30mm 内外で、背弁がないことで、一般のセミとは属を異にしている。体色は全体に黒く、中胸の背側に 1 対の黄色の点がある。♀は♂より一回り大きい。鳴き声は、「チッチッチッ・・・」と同じ調子で、パルス的で連続的である。



岡崎市岩中町 ♂, 1981年9月23日, 鈴木栄二 採集

## 【分布の概要】

国内では、北海道を除く全国に分布している。愛知県で豊田市（旧稲武町）、豊根村、新城市（旧作手村）、小牧市など県北東部の山地や丘陵地で生息が確認されている。

岡崎市では北東部の丘陵地から山地にかけの岩中町、大井野町、大柳町などで確認されている。

## 【生息地の環境／生態的特性】

山地や丘陵地にかけてのマツ、スギ、ヒノキなどの針葉樹林に生息する。成虫の飛翔力は極めて貧弱で、生息地域からの移動は難しい。水平状態から飛び上がることが苦手であるという。典型的な秋のセミで、夏が終わる 9 月になって、その数を増す。10 月まで鳴き声が聞かれるが、セミが鳴いているというより、キリギリスなど直翅目の仲間のそれに聞こえる。マツの小枝に静止することが多く、目視により見出すことは、なかなか難しい。また、よく通る鳴き声で、方々から複数聞こえると、鳴き声の出所を特定し、確認することも難しい。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

特に、マツ林は近年のマツノザイセンチュウによる松枯れが顕著で、生息域を狭めている。また、スギ、ヒノキ造林地は主に人の放置による荒廃が目立っている。また、本種の産卵がマツ林の下草であるツツジ類の生きた枝の中に行われる。つまり、林床にツツジ類のあるマツ林が生息の条件ともなっている。岡崎市では、近年このような環境が減少しつつある。

## 【保全上の留意点】

本種の生息には、マツ林とツツジ類などの下草の生える環境が必要である。ツツジ類などの下草をすべて除去してしまったり、下草の管理をせず、ツツジ類がなくなってしまうことが心配される。マツ、ヒノキ、スギなどの針葉樹だけを保護するのではなく、産卵の習性からツツジなどの下草も保全していく必要がある。

## 【関連文献】

- 穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上), 506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 石原 保, 1987. 学研生物図鑑 昆虫Ⅲ, 402pp. 学習研究社, 東京.  
 鈴木栄二, 1985. 岡崎市の半翅類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.838-852. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 三重県環境森林部自然環境室, 2006. 三重県レッドデータブック 2005 動物, 498pp. 財団法人三重県環境保全事業団, 津市.

(執筆者 鈴木栄二)



昆虫類 025	カメムシ目 イトアメンボ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>イトアメンボ <i>Hydrometra albolineata</i> (Scott)</b>		

**【選定理由】**

愛知県では、かつてはため池や河川周辺にふつうに見いだされていたが、現在では確実な生息場所がないくらい激減している状況である。

三重県（2006）によれば、全国的にも極めて希な種として扱われている。どちらかと言うと、人里に近いところで見いだされることが多く、そのために生息環境の変化、例えば水田の耕作方法の変化、里山の放置などによって壊滅状態である。生息は局所的である。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

**【形態】**

カメムシ目イトアメンボ科の中では、大型種である。体長は11～14mmで、細長い体型をしている。雌の方が雄よりもより大型である。体色は黒色の個体から暗褐色の個体まで様々である。また、長翅型の個体や短翅型の個体も見いだされている。半翅鞘は腹端に達しない。半翅鞘の中央に明らかかな白色の縦線が認められる。頭部の前端は発達している。本種と同様な環境に生息するヒメイトアメンボに似ているが体長、触角、突起などで異なる。

**【分布の概要】**

愛知県内の分布は、矢崎・石田（2008）によれば、過去の記録であり現在も生息しているのか分からない。岡崎市では、ヒメイトアメンボ *Hydrometra procera* (Horvath) の生息は確認しているが、本種については未確認である。全国的には、本州・隠岐・四国・九州・対馬・トカラ列島（中之島・宝島）・奄美大島に分布している。世界では、朝鮮半島・中国・台湾に分布している。

**【生息地の環境／生態的特性】**

人里の水田地帯と後背地に里山が立地するような場所、湿潤な草地が広がっているような場所に生息している。休耕地が増加してきているが、古くから水田が営まれていたような場所の方に生息の可能性はある。また、古くからのため池周辺の草地も可能性はある。ヒメイトアメンボは灯火に飛来するので、本種にもその可能性はある。雑草間では、行動は非常に緩慢である。捕食行動はうってかわり俊敏に捕らえることができる。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

愛知県においては、現在確実に生息している場所を把握していない。岡崎市においても同様である。個体の減少の一因は生息環境の一変である。人里の水田地帯は計画的に栽培がされているわけではなく、その動向によって生息環境が奪われている。また、ため池や河川は護岸工事が行き届くようになり、やはり生息環境が損なわれている。行動範囲が狭いために一時的に農薬などで絶滅した場所からの復元には時間がかかる。

**【保全上の留意点】**

大事な生命線は水資源の確保である。米の作付け方法が変化しても、水田地帯への流れの確保が必要である。河川流域の自然度を保つように人為的な方策が必要となってくる。例えば、河川工事など河川敷の改変に当たっては、水辺環境の専門家がアドバイスできるようにする。中長期にわたり調査結果を反映できるようにする。

**【特記事項】**

矢崎・石田（2008）によれば、本種と混生しているヒメイトアメンボの雌と誤認していることがあるので、今後再調査が必要である。

**【引用文献】**

三重県環境森林部自然環境室, 2006. 三重県レッドデータブック 2005 動物, 498pp. 財団法人三重県環境保全事業団, 津市.  
矢崎光彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

**【関連文献】**

鈴木栄二, 1985. 岡崎市の半翅類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.838-852. 新編岡崎市史編さん委員会.  
愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(執筆者 浅岡孝知)

クロゲンゴロウ *Cybister brevis* Aubé

## 【選定理由】

本種は湧き水のある水草などが生えた池や水溜まりなどに生息していて、かつてはゲンゴロウなどと共生していた種である。現在では農耕地や河川や池の整備などで生息する池などが少なくなり、絶滅に近い状態にある。しかし、額田地域にはまだ生息している池があるので、その水質や周辺の自然環境の保全を計ることとした。

## 県・国の評価区分

愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	準絶滅危惧

## 【形態】

体長は23～25mm内外で黒色で楕円形状、光沢を有し、背面は緩く膨隆し、鈍い緑色の光彩を有する。腹面は黒色～黒褐色で、肢は黄褐色～暗褐色を呈する。頭の両側に浅い凹陷部を生じる。

## 【分布の概要】

本州から九州の各地に分布しているが、どこでも個体数は減少している。国外では韓国や中国からも記録されている。

## 【生息地の環境／生態的特性】

生息環境は湧き水や水草のある水質のきれいな道路沿いの水路やため池などであるが、山道沿いに作られた側溝の水溜まりのあるところにも分布しており、ときに数頭が集団で見出される。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

ゲンゴロウなどと同じで、水田地帯が乾田化したり、ため池やその水路の水質の汚濁や外来種の繁殖などで、清水が流入するため池の環境が失われたのが減少の大きな原因と思われる。また、餌となるオタマジャクシやモロコやフナ類が育たなくなったことも原因と思われる。



(体長 23mm)

岡崎市茅原沢町, 2001年11月22日, 大平仁夫 採集

## 【保全上の留意点】

岡崎市内のため池や水路などに繁殖している外来種のおオクチバスやブルーギルなどを除去して、カエル類や在来の淡水魚を復活させ、山から滲み出るきれいな水を確保する場所を人為的に作り、水田地帯の水路やため池などの生態系を復活することが大切と思われる。また、北山湿地のような農耕地と隣接した環境では、清水を確保するための周辺の水源林と水路の保全も人為的に管理していくことが必要と思われる。

## 【関連文献】

森 正人・北山 昭, 2002. 図説 日本のゲンゴロウ 改訂版, 231pp. 文一総合出版, 東京.  
愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(執筆者 大平仁夫)

ミズスマシ *Gyrinus japonicus* Sharp

## 【選定理由】

本種はかつては流れの緩やかな水田の水路やため池や市街地の庭園の池や水槽などにも広く分布していた普通の種であったが、現在では市街地はもとより水田地帯からも姿を消した種になっていて、通常では見られなくなっているため、保全対策をしないと絶滅の恐れがある代表的な水生種となっている。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

## 【形態】

体長は6～7mm内外で黒色で光沢を有し、背面は膨隆する。腹面は平滑状で、中・後肢は幅広い扁平状になっていて、遊泳肢となっている。前肢は細長く、水面に落ちた餌を捕獲したり、水草に止まったりする機能をしている。

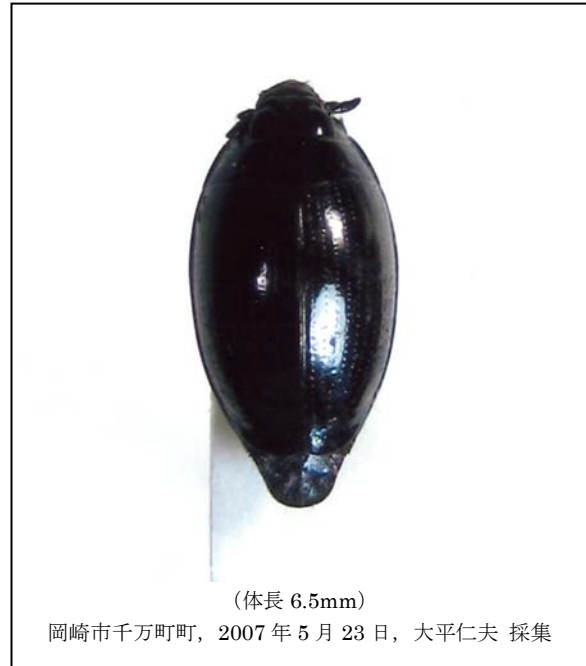
複眼は上と下にわかれていて、泳ぎながら水面上と水中を見ることができる。

## 【分布の概要】

北海道から九州の各地に分布している。岡崎市では人里から離れた額田地域の山間部の池や水流の緩い河川のよどみなどで、小集団を作って生息している。また、後翅が発達して飛翔もできるので、庭の人為的に作られた池にも一時的に生息することがある。

## 【生息地の環境／生態的特性】

成虫は通常は流れの緩い水面や池にいて、水面上を不規則に巡回しながらそこに落ちた小昆虫などを捕食している。また、翅端部から空気を取り入れて水中に潜ることもできるし、空中を飛翔して他に移動することもできる。卵は水草に産まれ、そこで孵化した幼虫は水中で生活、ボウフラなどを捕食して育ち、老熟した個体は水際の浅い土壌中で蛹室を作って蛹になり、そこで成虫になって水上生活をする。



(体長 6.5mm)

岡崎市千万町町, 2007年5月23日, 大平仁夫 採集

## 【現在の生息状況／減少の要因】

ミズスマシはかつては歌にも読まれたほどの身近なよく知られた普通種であったが、戦後の水田や水路の汚濁や水田の整備などで生息環境が変わり、現在では人里から離れた額田地域の山間地の池や水流の緩い河川のよどみなどで、小集団を作って生息している。本種は後翅が発達しているため飛翔して他の生息適所に移動することもできるが、河川敷の護岸工事や整備などで、現在の分布は山間部の池などに限られている。

## 【保全上の留意点】

本種は捕食性であるので、生息地に小昆虫類が豊富に分布する自然環境があり、流れの緩いきれいな水があることが必要である。したがって、生息場所の水質の良さとその周辺の自然環境にも留意することが大切である。

## 【関連文献】

大平仁夫, 1985. 岡崎市の甲虫類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.1024-1096. 新編岡崎市史編さん委員会.  
上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II), 514pp. 保育社, 大阪.

(執筆者 大平仁夫)

アオカナブン *Rhomborrhina unicolor unicolor* Motschulsky

## 【選定理由】

愛知県では山地に広く分布しているが個体数は多くない。最近の岡崎市の里地では、里山に依存する生活様式の近代化で、雑木林の手入れも従来ほどではなくなってきている。

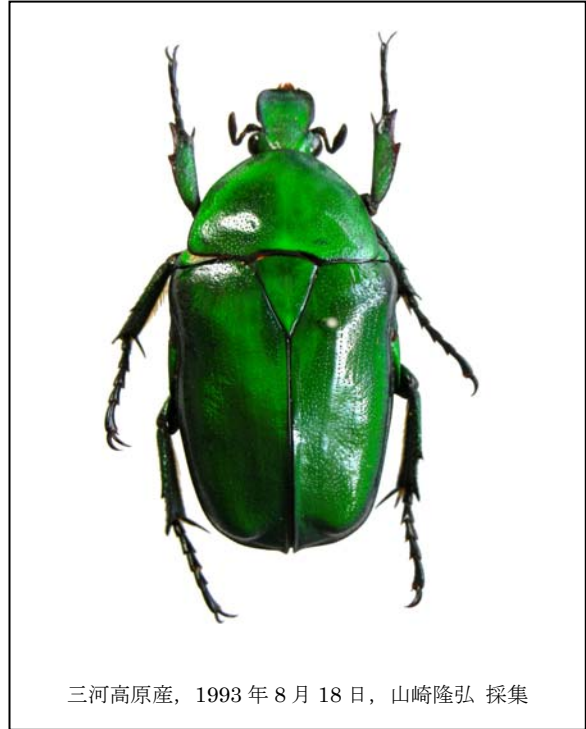
このため朽木の減少と樹液の出る樹も少なくなり、これに集まる本種の姿を見かけることは、顕著に少なくなってきており、総体的には個体数が減少傾向にある。

## 県・国の評価区分

愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【形態】

体長 26~29mm の中型美麗種である。背面は透明感のある明るい緑から緑黄色をしており、希に濃赤色や茶褐色のものもある。♂は♀に比べて触角の片状部がより長いことで区別される。カナブンの緑色の個体に似るが一見して区別できる。



三河高原産，1993年8月18日，山崎隆弘 採集

## 【分布の概要】

北海道・本州・四国・九州；朝鮮半島に分布する。本種は寒地系でこの仲間では最も北まで分布している。

愛知県では犬山市、知多半島北部、面ノ木峠、豊田市各地、茶臼山高原道路、豊根村、設楽町、岡崎市、新城市、豊川市、蒲郡市、豊橋市などで記録されており、岡崎市からは岡町・大幡（大平，1985）、本宮山（松野ほか，1990）などで記録がある。

## 【生息地の環境／生態的特性】

三河山間部では個体数が少ないが、低地では希に見られる程度である。朽木に産卵し幼虫はそれを食べながら成長し1~2年で成虫になるが、詳しい生態のサイクルなどはまだ不明な点が残されている。

最近では樹液の良好なものが少なくなり、本種を見出すのは困難な状況になってきた。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

初夏から夏にかけて雑木林の樹液に集まるが、本宮山や乙川などの河川敷で希に見ることができ程度で、近年の植林事業に伴う自然林の減少は深刻である。また、開発時における雑木林の減少が本種への影響も少なくないと思われる。

## 【保全上の留意点】

現在、本種が即座に消滅するような状況には至っていないが、本市からの生息が危ぶまれる状況を踏まえて、自然林の保全を図ると共に、雑木林や河川敷の改良事業時においては十分に留意することが必要である。

## 【特記事項】

九州の福江島には青藍色をした福江島亜種 *R.u.fukueana* がある。

## 【引用文献】

大平仁夫，1985. 岡崎市の甲虫類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.1024-1096. 新編岡崎市史編さん委員会.  
松野更一・伴 憲隆・穂積俊文，1990. 愛知県のコガネムシ類. 愛知県の昆虫（上），pp.339-361. 愛知県農地林務部自然保護課，名古屋.

## 【関連文献】

酒井 香・藤岡昌介，2007. 日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群 I, 173pp. 昆虫文献六本脚，東京.

（執筆者 山崎隆弘）

クロマダラタマムシ *Nipponobuprestis querceti* (E.Saunders)

## 【選定理由】

愛知県の低地から見出されている希少種であるが、岡崎市では奥殿町（大平, 1985）で記録されたのが最初で、2例目が上青野町（蟹江・戸田, 2008）から6♂4♀を豊島健太郎氏が原木の割り出しによって見出されてされている。その後、上里町（河路, 2011）でも記録されている。本種はエノキの古木の洞にいるが、都市部ではこうした森が減少しつつあり、これと共にある本種の生息が危ぶまれる。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	リスト外

## 【形態】

体長18~28mmの美麗種である。本種によく似たアオマダラタマムシとはより暗色で縦の隆起条が太いが、隆起は弱くて上翅には陥没紋がないことで区別できる。

## 【分布の概要】

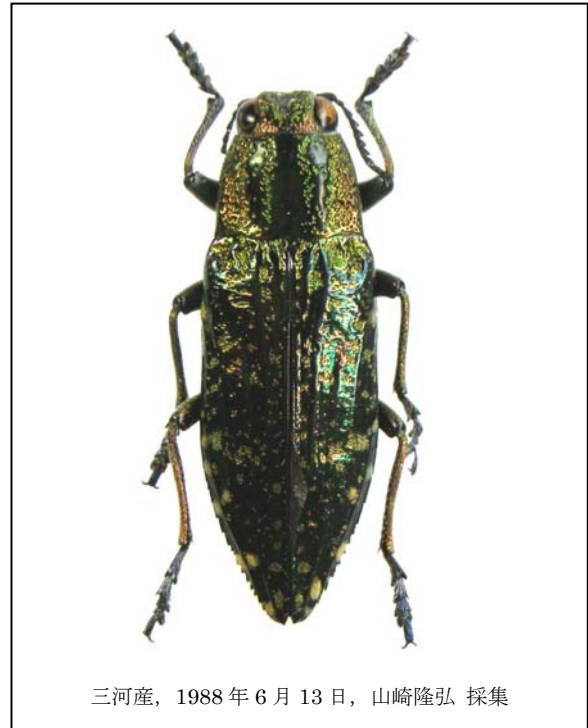
北部を除く本州・四国・九州、中国に分布する暖地系の種である。愛知県では希少な種で、岡崎市のほかには稲沢市（穂積, 1965）、豊橋市（穂積, 1990）、名古屋市（長谷川, 2002）から記録がある。最近では、河路掛吾氏（2011）が、豊田市敵部東町・稲沢市祖父江緑地・一宮市木曾川町・犬山市栗栖などから記録がある。

## 【生息地の環境／生態的特性】

成虫は5月頃から出現する。エノキの枯れ木に産卵し、幼虫はその材を食べながら成長する。古木の茂る公園や神社の森に残されたエノキの成木の洞内から発見されることが多い。一度に複数個体が得られることもあるが希である。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

発見には若干困難な面があるが、本市の生息実態は不明な点が多くあり、今後これらを明らかにする必要がある。その上で保護策も考慮すべきである。



三河産, 1988年6月13日, 山崎隆弘 採集

## 【保全上の留意点】

本種の生息環境は自然度の高い環境に生息しているため、開発に伴う人工改変は深刻な影響を与え大きなダメージとなる。特に公園、社寺林、河畔林、屋敷林などについては、本種の生存に関わるため、エノキを含む巨木の保全には十分に留意する必要がある。

## 【特記事項】

愛知県の「レッドデータブックあいち2009」では絶滅危惧種Ⅱ類（VU）として挙げられている。今のところ岡崎市における生息地は3ヶ所である。

## 【引用文献】

- 大平仁夫, 1985. 岡崎市の甲虫類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.1024-1096. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 穂積俊文, 1965. 船越俊平氏の標本箱より. ナビニュース, (55): 530.  
 穂積俊文, 1990. 愛知県の甲虫類 (II). 愛知県の昆虫 (上), pp.232-308. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.  
 河路掛吾, 2011. 愛知県におけるクロマダラタマムシの記録. 佳香蝶, 63(246): 40.  
 蟹江 昇・戸田尚希, 2008. 愛知県のタマムシ. 佳香蝶, 60(記念号): 207-230.  
 長谷川道明, 2002. 豊橋市. 佳香蝶, 63 (246): 40.

## 【関連文献】

- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II), 514pp. 保育社, 大阪.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(執筆者 山崎隆弘)

## ホングウチビクロコメツキ *Ampedus honguanus* Ôhira

### 【選定理由】

1954（昭和56年5月16日）に本宮山の闇苧溪谷で採集した1雄個体に基づいて、新種として記載した岡崎市原産の種であるが、その後にはこの原産地からの追加個体は見出されていない。新種の記載になった基本種が分布する本宮山は、岡崎市の昆虫類の分布にとっても重要な地域である。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

### 【形態】

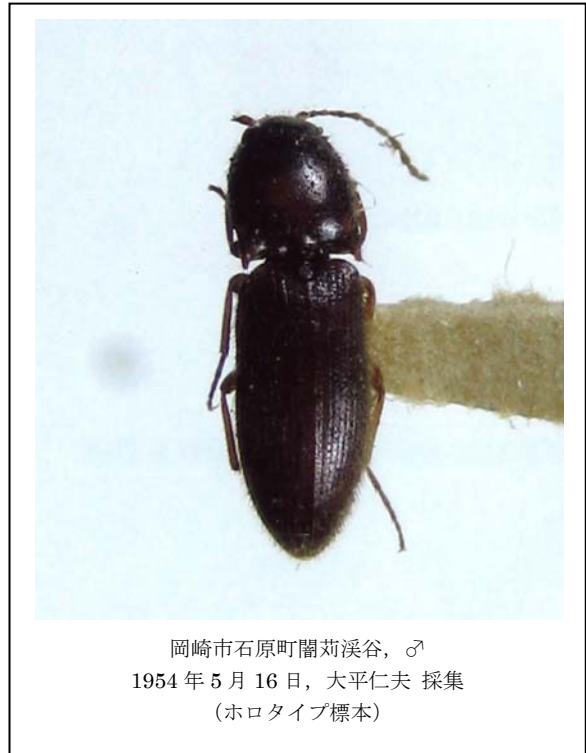
体長は5mm内外、体は暗褐色（栗色）で光沢を有し、両側は平行状で、体表面は褐色毛を生じ、触角と肢が黄褐色をした小形種である。

### 【分布の概要】

原記載以降では、愛知県では設楽町段戸裏谷から1975年6月に1雄個体が記録されているのと、豊田市足助町から1976年4月に1個体が見出されているのみで、県外では神奈川県、山梨県、三重県、和歌山県、奈良県、愛媛県などから記録されているが、どこでも個体数が少なく、まれに成虫が見つかる程度である。

### 【生息地の環境／生態的特性】

本種は小形で、どこでも偶然の出会いで見出されているので、詳しい生態などは判明していないが、主としてブナ林帯に分布する種のように思われる。幼虫は朽木に入り、朽木内の腐朽部で育っていて、2～3年で老熟した幼虫は秋に成虫になる。一部の成虫は蛹化場所から外部に出て、冬は樹幹の隙間などで越冬すが、大部分のものは翌春になってから外部に脱出して活動するようである。このことは、この属の類似種でもほぼ共通した習性である。



岡崎市石原町闇苧溪谷，♂  
1954年5月16日，大平仁夫 採集  
(ホロタイプ標本)

### 【現在の生息状況／減少の要因】

本種が最初に見出された闇苧溪谷でまだ2頭目の個体が得られないのは、もともと個体数が少ないことと、山道沿いの山林の大部分がその後に針葉樹林に置き換わって、生息環境が変わったことも影響していると思われる。

### 【保全上の留意点】

本種の幼虫は広葉樹の朽木内で育っていると思われるので、ブナ類の広葉樹林を保全することが必要である。闇苧溪谷沿いの昆虫類も、最近では単純化が目立っているため、植物の種類の多様化を計り、そこに生息する昆虫類の多様化も計って今後とも本種の生存を見守って行きたいと思う。

### 【関連文献】

Ohira, H., 1962. New or Little-known Elateridae from Japan, IV. (Coleoptera). Kontyu, Tokyo, 30: 262-264.  
大平仁夫, 1989. ホングウチビクロコメツキについて. 三河の昆虫, 36 (1): 263.

(執筆者 大平仁夫)

サトヤマシモフリコメツキ *Actenicerus kidonoi* Ôhira

## 【選定理由】

岡崎市桑原町産の個体に基づいて 2006 年（平成 4 年）に新種として記載した種である。成虫の発生は里山周辺に古くから残っている湿潤地域に限られているので、そこに存在する湿潤地の自然の歴史的価値の重要性を知るための指標種として貴重な存在である。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

## 【形態】

雄の体長は 17～19mm 内外で、雌個体は体長 20～22mm 内外。体は船形状でやや扁平、黒色で鈍い金属光沢を有し、体背面は灰色と褐色毛をスポット状に生じ、上翅面はこれらの毛による不規則な斑紋を生じる。触角と肢は黒褐色であるが、雌はより赤褐色化を呈するものが多い。体腹面は灰黄色毛を一様に生じている。



♂（体長 18mm）

岡崎市鳥川町，2011 年 6 月 10 日，大平仁夫 撮影

## 【分布の概要】

分布域はまだよく判明していないが、里山と農耕地とが隣接するところに古くから存在している湿潤地に分布が限定されている。三河地方では新城市以南、西三河地方では旧豊田市以南である。より山岳地帯には、オオシモフリコメツキ (*A. orientalis*) が分布、棲み分けが行われている。

## 【生息地の環境／生態的特性】

主として三河地方の低地帯の里山と農耕地とが接する付近にある古い湿潤地に、成虫は 4 月下旬から 5 月下旬頃に発生、周辺の藤の花や広葉樹の新芽に飛来している。発生個体数は少ない。幼虫はまだ不明であるが、湿潤地の土壌中に生息していると思われる。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

前述のように、本種の分布は低地の里山と農耕地と接するあたりにある古くから残っている狭い範囲の湿潤地に限られているので、どこでも発生個体数が限られており、そこが人為的に土地改変されると生息地が失われることが減少の要因になっている。

## 【保全上の留意点】

前述のように生息環境が限られており、個体数も少ないので、土地整備などで生息地が破壊されないようにして、湿地としての生息環境を保全することが大切と思われる。

## 【関連文献】

- Ohira, H., 2006. New or Little-known Elateridae from Japan, XLIX. *Elytra*, Tokyo, 34 (2): 337-342.  
 大平仁夫, 2008. 三河地方が原産のサトヤマシモフリコメツキについて. 鳳来寺山自然科学博物館館報, (37): 1-2.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(執筆者 大平仁夫)

ウンモンテントウ *Anatis halonis* Lewis

## 【選定理由】

愛知県における分布では本宮山山系が本種の南限の生息地であるが、本宮山山頂部（山崎, 2008）と豊川市千両町（宇野, 1980）の2例の記録があるにすぎない。寒地系の種であるため、温暖化の影響を受けやすくきわめて難しい状態に置かれている。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【形態】

体長は 6.7~8.5mm のテントウムシのなかでは大型種に属する。腹面は黒色で上翅の斑紋は 2-3-3-1 に並ぶが、その一部には変化がみられ、なかには黒点が消失する個体がある。

## 【分布の概要】

北海道・本州・四国・九州・千島に分布する。愛知県では面ノ木峠、茶臼山、日本ヶ塚山、段戸裏谷など主に奥三河山地に分布している。これらは中央アルプスの末端にあたり、長野県南信方面から続く分布の流れであり、設楽町裏谷をへて岡崎市の本宮山系までみられる。岡崎市からは本宮山山頂部（山崎, 2008）で記録がある。

## 【生息地の環境／生態的特性】

本種の活動は一般的には昼間帯であるが、光走性の性質があり、夜間の灯火にも飛来してくることがよく知られている。

捕食性のテントウムシでアブラムシを好んで食べる。シラカンバの生育する長野県などでは、これに着くアブラムシとの関係から、個体数が多くみられる。岡崎市における状況はよくわかっていないが、ここでの個体密度はきわめて低いものと思われる。

本宮山（標高 789.2m）は、奥三河の主産地からはやや離れた飛地の生息地で、岡崎市では唯一の産地となっている。



岡崎市石原町本宮山山頂部,  
2006年7月15日, 山崎隆弘 採集

## 【現在の生息状況／減少の要因】

ここでの生息状況は数がきわめて脆弱なことから、ともすれば温暖化や人為的環境の変化を受けやすく衰退する可能性がある。とくに現状における山頂部での乾燥化は深刻であり危惧される。

## 【保全上の留意点】

岡崎市においては分布上の貴重な種のひとつであり、動向には十分配慮すべきである。残された自然林の保全には十分に留意し、落葉樹を主とした森林の育成が重要である。

## 【特記事項】

愛知県での分布の中心は茶臼山（1415.2m）で、その周辺部での個体数は少なくない。愛知県全体としてみた場合では、今のところ危機的な状況には置かれていないと思われる。

## 【引用文献】

宇野 茂, 1980. ウンモンテントウを豊川市で採集. 三河の昆虫, (25): 100.  
山崎隆弘, 2008. 本宮山山系のテントウムシを探る. 三河本宮山昆虫誌, pp.30-34.

## 【関連文献】

日本環境動物昆虫学会・生物保護と環境アセスメント調査手法研究部会（編）, 2009. テントウムシの調べ方, 148pp.

（執筆者 山崎隆弘）



ムツキボシツツハムシ *Cryptocephalus ohnoi* Kimoto

## 【選定理由】

全国的にも珍しい種であるが、愛知県では奥三河山地では少なくない。しかし、中山地域では希な種である。岡崎市の本宮山山頂部（山崎, 2008）の狭い範囲で見出されているが、この個体群はきわめて脆弱であるため、当産地での生息が危ぶまれている。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【形態】

体長 4.1~4.2mm で、本州のみに分布する種である。上翅は黒色をしており、6 対の黄褐色の紋がある美麗種で、一見キボシツツハムシに似ているが、斑紋が異なる。

## 【分布の概要】

愛知県では三河山地の旭高原（山崎, 2001）、面ノ木峠（山崎, 1996）、茶臼山（山崎, 1992）などに生息している。一部の場所によっては個体数も少なくないが生息地は限られている。こうしたことから本宮山における生息地は、本県最南の場所であり分布上からも貴重な存在である。

## 【生息地の環境／生態的特性】

寄主植物はヤマナラシが挙げられているが岡崎市では不明である。茶臼山では針葉樹のマツ科モミ属の枝をビーターティングして得られることが多い。本宮山においても同様であった。産地では一度に数頭が得られることも希ではない。生態については不明な点が多く、まだよくわかっていない面がある。



岡崎市石原町本宮山山頂部,  
2006年7月15日, 山崎隆弘 採集

## 【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県での本種の分布の中心は茶臼山（1415.2m）であるが、その周辺部での個体数は現在でも少なくない。今のところ危機的な状況には置かれてはいないと思われる。しかし、岡崎市においての観察では、本宮山で見出した際には 20 数頭程度の個体であった。その後は徐々に数が減ってゆき、現在の生息状況はきわめて深刻な状態となっている。ともすれば温暖化や人為的環境の変化により消滅する可能性もある。とくに現状における山頂部での森林の衰退と乾燥化は深刻である。動向については今後も注意深く観察する必要がある。

## 【保全上の留意点】

生息地周辺の一帯の自然環境は人工改変の面積が多く、旧来の森が失われつつある。また周辺部の緑地も人工林が成長して本来の環境とは異なったものに置き換わってきている。今後においては、自然林の保全には十分に留意し、従来の森林の姿の育成に重点がおかれることが重要である。

## 【特記事項】

本種は神奈川県では絶滅危惧種に指定されている（神奈川県昆虫談話会, 2004）。

## 【引用文献】

- 山崎隆弘, 1992. 三河地方で採集した興味ある甲虫類. 三河の昆虫, (39): 337-338.  
 山崎隆弘, 1996. 昆虫類・コウチュウ目・ハムシ科. 稲武町史・自然・資料編, pp.248-257. 稲武町.  
 山崎隆弘, 2001. 旭町の甲虫目・ハムシ科. 旭町の昆虫, pp.158-166. 財団法人旭高原自然活用村協会.  
 神奈川県昆虫談話会, 2004. 神奈川県昆虫誌Ⅱ, 836pp.  
 山崎隆弘, 2008. ハムシ図譜. 三河本宮山昆虫誌, pp.35-39.

## 【関連文献】

- 木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説, 639pp. 東海大学出版会.

(執筆者 山崎隆弘)

ツヤネクイハムシ *Donacia nitidior* (Nakane)

## 【選定理由】

湿地に依存して生息する種で、自然度を知る上からも重要な種である。愛知県内では広く湿地に生息している。

岡崎市では千万町、池金町など数ヶ所から確認されているが、ごく限られた場所で温存されているにすぎないため貴重である。

## 県・国の評価区分

愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【形態】

体長 6.5mm 前後。体色は黒色で鈍く銅色光沢がある。近似種とは触角基部の角節の基部が赤褐色をしているのと、肢の脛節基部は赤褐色であること、前胸背板は顕著な横しわを装い、ほとんど剛毛を欠くことで区別される。

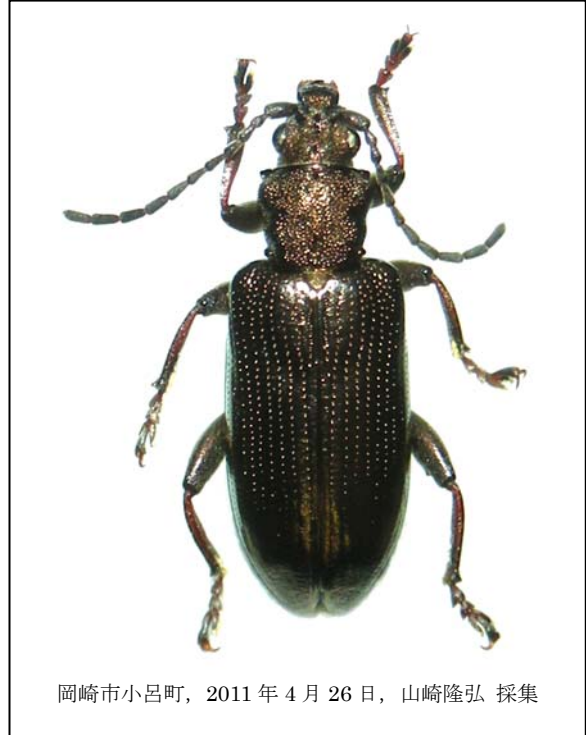
## 【分布の概要】

湿地特有の種で、本州と佐渡に分布する日本固有の種である。ネクイハムシのなかでは比較的ポピュラーな種であるが、限られた場所ではしか生息していない。

愛知県では犬山市（長谷川・吉富, 1998）、春日井市（長谷川・吉富, 1998）ほか、名古屋市（長谷川・吉富, 1998）ほか、豊田市（高橋, 1988）ほか、設楽町（山崎, 1996）、新城市（野尻湖昆虫グループ, 1985）ほか、豊橋市（高橋・高桑, 1987）ほかで記録されている。岡崎市においては小呂町（山崎, 2012）の記録がある。

## 【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は湿地に生育するスゲ類を食餌としており、本市の小呂町では 5 月頃スゲの花穂に集まる交尾中の成虫個体を観察できる。当地では相当数を観察することができるが、その期間は短い。



岡崎市小呂町, 2011年4月26日, 山崎隆弘 採集

## 【現在の生息状況／減少の要因】

現在のところ、小呂町については保護策が講じられており生息状況も良好であるが、将来周辺地域を含み人為的な環境の変化、水脈や気候の変化があれば、それに伴って湿地の乾燥化が進むことになる。僅かな変化でも本種に与える影響はきわめて深刻となる。

## 【保全上の留意点】

生息地のみを保全するだけでなく、開発時には周辺地域を含めた総合的な自然環境を重視することが必要で、湿地の保全には十分な配慮をする必要がある。

## 【特記事項】

本県には 6 種のネクイハムシが知られているが、本種に類似したカツラネクイハムシがあるので同定には注意する必要がある。

## 【引用文献】

- 長谷川道明・吉富博之, 1998. 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博研報, (8): 41-48.  
 高橋和弘・高桑正敏, 1987. ネクイハムシ類・1986年の採集・観察記録. DONACHIIST, (1): 24-26.  
 高橋和弘, 1988. ネクイハムシ類・1987年の採集記録. DONACHIIST, (2): 22.  
 野尻湖昆虫グループ, 1985. アトラス日本のネクイハムシ, pp.182. 野尻湖昆虫グループ.  
 山崎隆弘, 2012. 愛知県旧岡崎市のハムシ類. 三河生物, (4): 27-40.  
 山崎隆弘, 1996. 設楽町誌『自然編』「資料編」動物 昆虫類 甲虫類 ハムシ科, pp.526-537. 設楽町.

## 【関連文献】

- 林 成多, 2012. 日本のネクイハムシ, 95pp. むし社, 東京.  
 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009-動物編-, 651pp.  
 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(執筆者 山崎隆弘)

ミヤマヒラタハムシ *Gastrolina peltoidea* (Geber)

## 【選定理由】

奥三河山地では比較的普通に生息する種であるが、岡崎市においては本宮山（山崎, 1989）に産する。最近になって現地での生息数の減少が目立つようになってきた。この要因については不明な点が多いが、分布上興味深い寒地系の種の衰退が懸念される。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【形態】

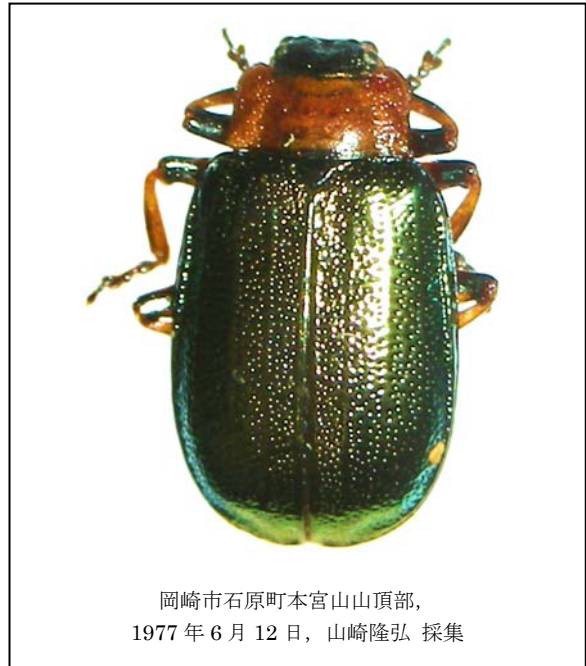
体長は 6mm 前後で扁平な形をしている。上翅には光沢があり、本宮山では緑藍から金緑色のものが多いが、なかには紫青色や銅色をした個体も得られている。近似種のクルミハムシは前胸背板の両側が燈色で、中央に細い縦溝があるので区別できる。

## 【分布の概要】

北海道と中部以北に分布する寒地系の種である。愛知県の生息地は主に奥三河山地に広く分布しており、生息個体数も少なくないが、本県南部の地域では幸田町の山地まで分布するが、ここでは希に得られる程度となる。岡崎市の本宮山山頂部（山崎, 1989）においては比較的普通に生息していたが、最近の観察においては減少傾向にある。

## 【生息地の環境／生態的特性】

ハンノキやケヤマハンノキなどの葉裏に卵塊状に産卵し、幼虫は多数が群がって摂食する。岡崎市の山地では、成虫は 5 月下旬ころから 7 月下旬にかけて見られる。本種は年 1 化であり、成虫越冬をすることが知られている。



岡崎市石原町本宮山山頂部,  
1977 年 6 月 12 日, 山崎隆弘 採集

## 【現在の生息状況／減少の要因】

本種のように寒地系の種については、近年の温暖化などが何らかの影響を与えているように考えられるが、自然林の減少も要因のひとつではないかと思われる。

## 【保全上の留意点】

自然林の重要性は多くの昆虫類の生存には欠かせない要件である。本種の寄主植物は各地に多いハンノキやケヤマハンノキであるが、保全にはこの寄主植物のある環境が重要である。併せて森全体の環境保全にも留意すべきである。

## 【特記事項】

本種の観察範囲は本宮山山頂部付近の観察結果であったが、その他の場所についても注意深く見守る必要がある。

## 【引用文献】

山崎隆弘, 1989. 三河本宮山のハムシ. 三河の昆虫, (36): 248-255.

## 【関連文献】

木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説, 639pp. 東海大学出版会.  
大平仁夫, 1985. 岡崎市の甲虫類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.1024-1096. 新編岡崎市史編さん委員会.

(執筆者 山崎隆弘)

ギンイチモンジセセリ *Leptalina unicolor* (Bremer et Grey)

## 【選定理由】

1980年代、愛知県では、三河地方のみに生息し、その産地は極めて局地的であったが、岡崎市や豊橋市周辺では、発生期には、かなりの数の個体を確認することができた。しかし、最近、岡崎市以外では記録が出ていない。岡崎市では、2011年5月までは、発生が確認できたが、それ以降は記録がない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	準絶滅危惧

## 【形態】

翅表には斑紋がなく、翅全体が一様な黒褐色である。裏面は、明るい褐色で、後翅裏面の中央に太い帯があり、春型では、銀白色となるが、夏型では、鈍い黄色の帯となり、あまり目立たなくなる。

成虫は主にヒメジョオン、シロツメクサなどの花を好んで吸蜜する。水たまりや汚物にも集まることがある。

他のセセリチョウ科の種に比べると、本種は、雌雄とも翅の長さに対して腹部が長い。腹端は鋭くとがっており、この形状は他の種には見られない。頭部には前方に突き出した吻がある。雄は、雌よりも小型になり、前翅頂が少し丸くなる。

特異な体形や斑紋をしているため、近似種はおらず、同定は容易である。



♂

岡崎市上青野町，2011年5月14日，杉坂美典 撮影

## 【分布の概要】

愛知県では、安城市、岡崎市、豊田市、豊川市、北設楽郡豊根村、設楽町、新城市、豊橋市に記録があったが、岡崎市以外では、2000年以降の記録がない。

岡崎市では、矢作川の東側堤防の天白町、上青野町に分布していた。2011年5月14日に上青野町で写真撮影された記録（1♂1♀）が最後のものとなり、それ以降は見つかっていない。

## 【生息地の環境／生態的特性】

河川の堤防に広がる明るい草地や林間の草原、鉄道の線路周辺などに局所的に生息する。幼虫は、イネ科植物（ススキ、エノコログサ、チガヤ、ヨシなど）を食べる。

岡崎市では、年3回発生で、5月上旬～中旬、7月上旬～中旬、8月下旬～9月上旬に成虫が見られる。

成虫は、ススキの草原やその周辺を地上すれすれに低く、ひらひらと飛び周り、なかなか止まらない。しかも止まったとしても、人の気配には非常に敏感で、すぐに飛んでしまう。追っていくと、人が入れないススキの草原の奥深くに飛び去ってしまうことが多い。近寄って写真撮影することは非常に難しい種の1つである。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

岡崎市では、矢作川の河川敷に広がるススキの草原やその周辺に生息していたが、2011年の秋に発生した台風15号によって矢作川の水位が上昇し、発生地のススキの草原は濁流にのまれ、完全に水没した。その後、ススキの草原は2012年の春には復活した。しかし、その年の5月から9月にかけて、既知産地を10回以上調査したが、本種は全く見つからなかった。

岡崎市内の矢作川堤防には、上記の既知産地以外にも、同様な環境を有する草原が数ヶ所はあり、これまでに数回、調査を行ったが見つからなかった。しかし、発生している可能性はないとは言えないので、調査を続ける必要がある。

## 【保全上の留意点】

人里近くに発生地があることが多いため、土地の改良工事などによって、姿を消すことが多い。また、発生地の草原の環境は、クズなど植物が草原を覆うようになると本種は発生しなくなるので、人手を適度に加えて環境を保全していく必要がある。

## 【関連文献】

猪又敏男・植村好延・矢後勝也・神保宇嗣・上田恭一郎，2010-2013. 日本産蝶類和名学名便覧. <http://binran.lepimages.jp/>  
 野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所，2007. 日本のレッドデータ検索システム. <http://www.jpnrdb.com/>  
 愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-，651pp.  
 愛知県環境部自然環境課，名古屋.

(執筆者 杉坂美典)

ウラクロシジミ *Iratsume orsedice* (Butler)

## 【選定理由】

1990年前後には、尾張地方の北部の丘陵地や三河地方に発生していたが、2000年以降、食樹のマンサクが大量に枯れるようになり、尾張地方では、全滅する場所も現れた。岡崎市では、池金町で発生していたが、マンサクが全滅し、本種も姿を消した。藤川町には、マンサクが群生する林があったが、2000年以降に激滅し、本種は見つかっていない。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	リスト外

## 【形態】

雄の翅表は美しく輝く銀白色、雌は灰白色で外縁部には幅広い暗褐色の斑紋が広がる。翅裏は黒褐色である。外縁には、半円状の斑紋が連続して並ぶ。他のミドリシジミ類と同じように細い白線が前後翅の中央に縦に走っている。

和名のウラクロシジミとは、裏面が黒いシジミチョウという意味である。特異な斑紋をしているため、同定は容易で、近似種はいない。



♂

岡崎市池金町，1997年6月10日，鈴木光司（飼育）

## 【分布の概要】

1990年前後では、春日井市、瀬戸市には、局所的ではあるが、多数の発生地があり、1つの発生地における個体数も多かった。豊田市、岡崎市、南設楽郡などでも、局所的に発生していたが、個体数は少なかった。

## 【生息地の環境／生態的特性】

山地から丘陵地の溪谷沿いに生えているマンサク林に生息し、マンサク林が局地的な分布をするため、発生地は限られる。成虫は年1回、6月中旬から7月にかけて出現する。昼間は、マンサクやその周辺の葉上でじっとしていることが多い。夕刻になると活発に活動し始め、樹冠部に沿って飛翔する習性がある。特に雄は占有行動をし、見立つ葉の先端部に止まって縄張りを見張り、他のチョウが飛来すると追い回す行動をする。雄雌ともクリヤノリウツギ、シシウドの花などに集まる。卵はマンサクの芽の基部に1～2卵ずつ産まれ、卵で越冬する。幼虫はそれらの若芽、若葉を食べる。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

岡崎市では、池金町の北山湿地を流れる小川沿いに生えていたマンサクの周辺で生息していた。1986年6月に池金町で3頭の雄が記録され、1987年2月には、マンサクの越冬芽から卵が採集された。その10年後の1996年にも卵が採集され、1997年6月には、その卵から成虫が羽化している。

しかし、2000年以降は、多産地であった尾張地方の北部では激滅し、三河地方からも記録が出ていない。2005年から2012年にかけて、岡崎市の各所を調査したが、池金町のマンサクは全滅し、藤川町のマンサク林も激滅し、本種の最近の記録はない。

## 【保全上の留意点】

本種の中で、東海地方や西日本に分布するグループは、マンサク科のマンサクを食樹としているため、発生地が限られ、環境変化の影響を受けやすい。さらにマンサクが何かの原因で激滅している現状は、本種の存続にとって深刻であり、この状況を食い止めない限り、本種も激滅していくだろう。マンサクの激滅理由を解明し、早急に対策を講じる必要がある。

## 【特記事項】

2000年以降のマンサクの立ち枯れ現象は、西日本一帯の低山地でも起こっており、原因は知られていない。

本種の中で、北海道から日本海側に分布するグループは、マンサク科のマルバマンサクを食樹としており、マルバマンサクの立ち枯れ現象の報告はない。

## 【関連文献】

猪又敏男・植村好延・矢後勝也・神保宇嗣・上田恭一郎，2010-2013. 日本産蝶類和名学名便覧. <http://binran.lepimages.jp/>

(執筆者 杉坂美典)

クロヒカゲモドキ *Lethe marginalis* (Motschulsky)

## 【選定理由】

愛知県では、三河地方の丘陵地から山地にかけて生息しているが、その分布は極めて局地的で、近年はその数を減らしている。岡崎市の発生地では、かなりの数の個体が見られたこともあったが、その発生地にゴルフ場が作られ、現在では、散発的な記録が出るだけとなった。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	絶滅危惧ⅠB類

## 【形態】

前翅の翅表は、中室から基部にかけて濃褐色、亜外縁はやや淡い褐色となる。後翅の翅表には、外縁に沿って眼状紋が並ぶ。

裏面は、全体的にやや淡い褐色である。前翅には、3個の眼状紋があり、後翅の外縁には5個が並び、その内側に大きな眼状紋が1つある。

雌は、雄よりも大型となり、翅形が丸みを帯びる。

本種は、クロヒカゲ、ヒカゲチョウに似ているが、より大型となる。本種の前翅裏面の眼状紋は、翅頂側から3個目が最大となる。他種では、逆にこの3個目の眼状紋が小さくなることから容易に区別することができる。



♂

岡崎市蔵次町，2008年8月2日，伊藤啓司 撮影

## 【分布の概要】

愛知県では、岡崎市、豊田市、北設楽郡、新城市に記録があり、三河地方しか分布していない。岡崎市以外の発生地は、極めて局所的で、その発生地での個体数も少ない。

岡崎市では、東北部の丘陵地に、局所的ではあるが各所で発生している。蔵次町では、比較的数量多くの個体が見られたこともあった。

## 【生息地の環境／生態的特性】

近似種のクロヒカゲやヒカゲチョウは、樹木が密生した薄暗い林を好むが、本種はそれより明るい林を好む。飛び方は、クロヒカゲやヒカゲチョウよりもゆっくりと飛び、すぐに止まる習性がある。アベマキ、コナラなどの雑木林の周辺の開けた空間、林道沿いにある明るい日影などに飛来することが多い。獣糞、腐果、アベマキの樹液などに集まることもある。日中は、あまり飛び回らず、樹林内の下草や樹皮などで静止していることが多いが、夕方には活発に活動するようになる。さらに雄は、見通しのよいような突き出した葉や枝に止って縄張りを主張し、追飛行動をする。

年1回の発生で、成虫は、7月上旬から8月にかけて見られ、特に8月には、個体数が多くなる。卵は、食草のチヂミザサ、ススキなどのイネ科の裏面に1卵から数卵ずつ産み付けられ、幼虫は4齢もしくは5齢で越冬する。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

岡崎市では、1982年に岩中町で1♂が記録され、その後、蔵次町でも散発的に記録が出るようになった。1990年に入ると、理由はよく分からないが、蔵次町で多産するようになった。しかし、ゴルフ場の造成のため、蔵次町の発生地の中心部が開発され、ゴルフ場内では姿を消した。現在では、そのゴルフ場周辺の蔵次町一帯、岩中町、須渚町などにあるアベマキ、コナラの雑木林の周辺にわずかの数が生息している。

## 【保全上の留意点】

現在、本種が発生している場所を中心に、アベマキやコナラなどの雑木林やその周辺にあるススキ林などの自然を保全することが大切である。さらに、本種の確実な採集・観察地点として、岡崎市は全国的に知られるようになった。将来的には、本種を市の指定希少野生動物種として指定し、採集禁止にして保全していく必要があるかもしれない。

## 【関連文献】

猪又敏男・植村好延・矢後勝也・神保宇嗣・上田恭一郎，2010-2013. 日本産蝶類和名学名便覧. <http://binran.lepimages.jp/>  
 野生生物調査協会・Envision 環境保全事務所，2007. 日本のレッドデータ検索システム. <http://www.jpnrdb.com/>  
 愛知県環境調査センター(編)，2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009-動物編-，651pp.  
 愛知県環境部自然環境課，名古屋.

(執筆者 杉坂美典)